

第35図 平面図

南構古墳群に関しては、北地区を中心に計11基が復元されている(第38図)。基本的に墳丘を検出することはできなかったが、周囲の造構の空白地帯を墳丘の痕跡と理解し、各古墳を復元している。いずれも円墳と考えられる。これらの古墳は、多くの堅穴建物と同時期と考えられるが、平面的な重複は認められない。

なお、本章における土器の分類および各造構の時期については、第6章における検討結果を反映させたものである。



第36図 北地区平面図



第37図 南地区平面図



第38図 南構遺跡と南構古墳群



第39図 積穴建物

第2節 壁穴建物

1. 概 要

計21棟検出されている。その分布は南地区に限られている(第39図)。南地区においても、北側においては認められず、南地区の中央部から南端部かけて検出されている。特に南地区中央部に集中する傾向が認められる。後述する南構古墳群の分布範囲と明らかにその範囲を越えている点が注目される。なお、住居跡が分布する範囲は南北方向で約110mである。

検出された住居跡は、いずれも平面形が方形傾向にあり、円形のものは認められない。ただし、規模において差が顕著である。また、SH01とSH02、SH05とSH06はそれぞれ切り合い関係にあるが、他はすべて単独で検出されている。

2. 壁穴建物

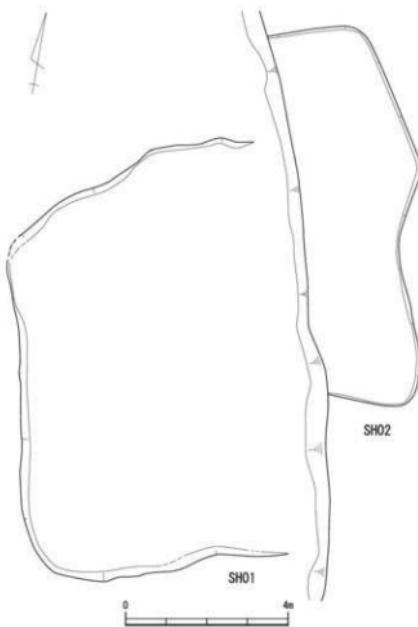
SH01(図版1・2 写真図版27・54~56 附表28)

検出状況 第1次調査で検出した住居跡である。南地区的中央部西側で検出されている(第39図)。SH07の北東側、SH08の北西側に位置する。そしてSH02の西側に隣接する(第40図)。

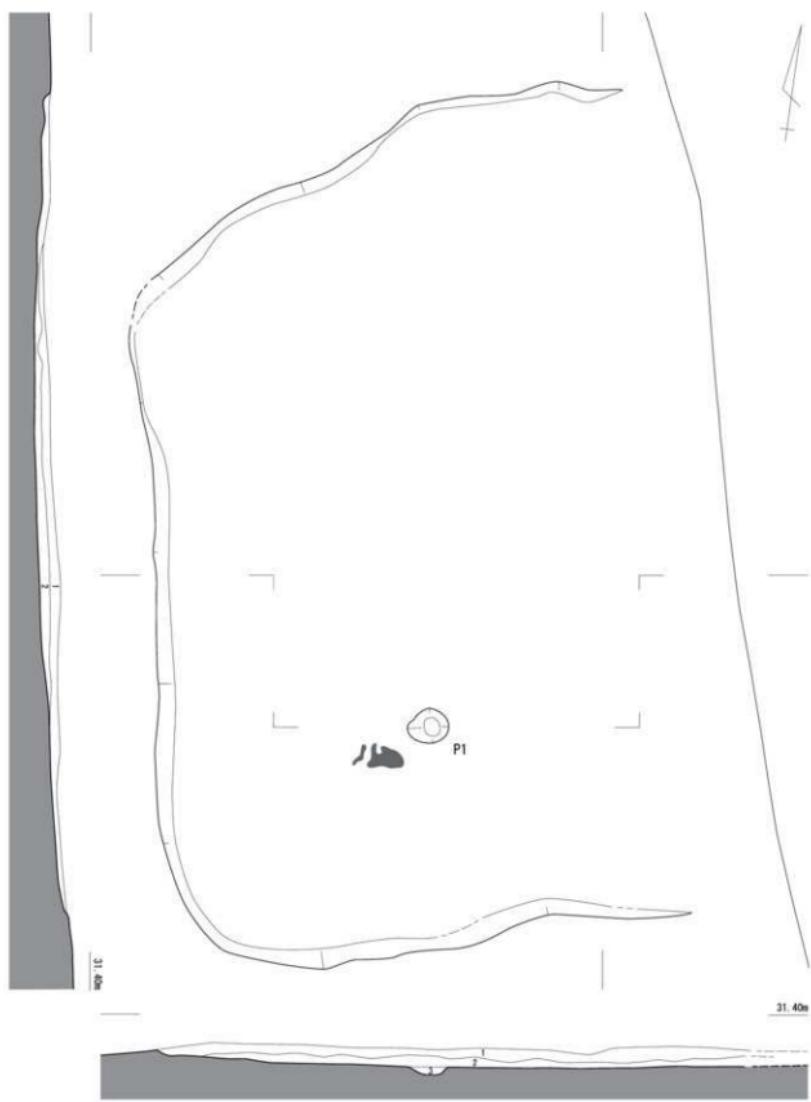
ところでSH02については第2次調査で検出された住居跡である。その検出位置から判断して、当初は本住居跡の東部を検出したものと判断していた。このため、遺構番号についても同じ番号を付けていた。しかし調査終了後、第1次調査と第2次調査の成果を平面図上で合成した結果、異なる住居跡である可能性が高いことが明らかとなつた。このため、本報告では異なる住居跡として報告する。ただし、両住居跡の切り合い関係については、調査では明らかにすることことができなかつた。

本住居跡の検出範囲は西側に限られ、全体の1/2強を検出したものと考えられる。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

形状・規模 住居跡の平面形については、基本的には方形であったものと考えられる(第41図)。ただし、西辺と南辺がほぼ直角関係にあるのに対して、北辺は西辺と直角関係ではない。したがって、かなり歪んだ平面形となっている。建物の規模は、南北方向の最大規模は10.20mを測り、南辺で6.00m検出している。



第40図 SH01とSH02



1. 黒褐色小礫混じり黑色極細砂 2. 暗褐色極細砂 3. 黒褐色極細砂～細砂(P1埋土)

A horizontal number line starting at 0 and ending at $3m$. There are tick marks at 1 and 2.

第41図 SH01

西辺を基準とした棟軸方向はN10° 00' Wを示している。床面は比較的平坦で、検出面からの深さは最深部で25cmを測る。また床面の標高は30.80mである。

埋 土 上から黒褐色細混じり黒色極細砂と暗褐色極細砂の2層からなる。その層相から判断して、2層とも人為的に埋められた層と考えられる。

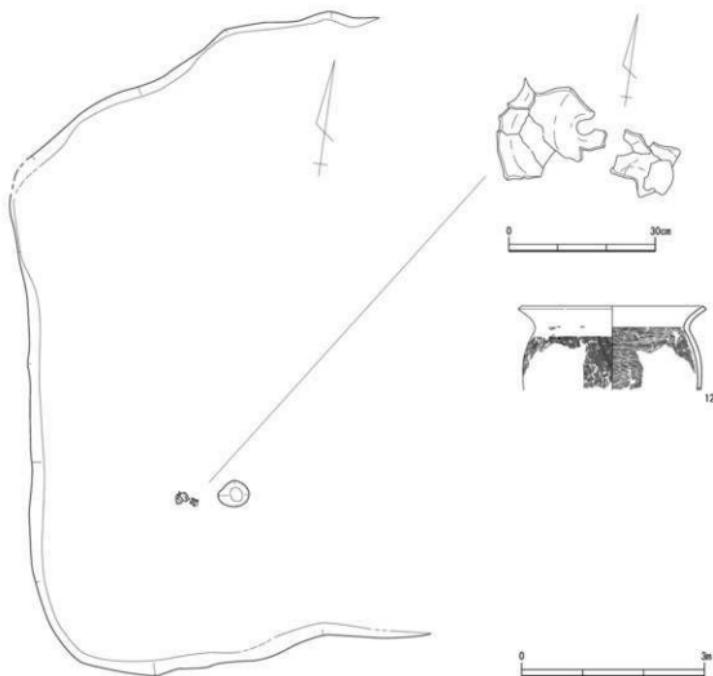
屋内施設 主柱穴1穴(P 1)を検出している。平面形は梢円形をなし、床面における規模は50cm×43cmである。床面からの深さは10cmである。埋土は、黒褐色極細砂～細砂である。柱痕については、平面・断面とともに確認することはできなかった。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している(図版1・2)。特に12については、主柱穴の西側の床面直上から、押し潰された状態で出土している(第42図)。

土師器 杯A・高杯・甕・製塙土器・甕が出土している。

杯A 杯Aa2に分類される1の1個体である。体部から口縁部にかけて外反傾向にあり、底径が10.50cmと大きな点が特徴である。底部外面を除く内外面が回転ナデの後、横方向の丁寧なヘラミガキにより仕上げられている。内外面に赤彩が施されている。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、その後静止ヘラ削りが施され、最後にナデにより仕上げられている。

高杯 2～7の6点出土している。2が高杯Dbに、3と4が高杯Dcに、5が高杯Daに分類される。



第42図 SH01土器出土位置・出土状況

2についてはV字状を基本とした暗文が連続して施されている(写真図版54)。脚部は2が最も良好に残存するが、脚柱部に限られる。外面はタテ方向のヘラナデ、内面はナデにより仕上げられている。また、坏部との接合部外面には、4個体とも縦方向の工具痕が認められる。

3～5は、体部～口縁部が内清傾向にある。坏底部外面は指オサエの後ナデにより、体部～口縁部は内外面とも横ナデにより仕上げられている。その後、内面見込みには暗文が施されている。いずれも放射状を意識した暗文である。

6については高坏Cに分類されるものと考えられる。坏部外面は縦方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、坏底部に関しては摩滅のため観察できないが、口縁部は横ナデにより仕上げられている。脚部は、外面が縦方向のハケの後同方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面は、脚柱部がヘラナデ、裾部が指オサエの後ナデにより仕上げられている。指オサエに伴う指頭圧痕が顕著に認められる。

この他7については体部まで残存しないため細分は困難であるが、調整方法および坏部内面の暗文の特徴等から、高坏Dに分類されるものと考えられる。暗文については、2と同様、V字の連続である。また、接合部外面には工具痕が認められる。脚柱部外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。

甕 8～15の8点出土している。甕は、甕Aa・甕Ee・甕Fa・甕Fe・甕Hが認められる。

甕Aaは13の1個体である。内外面とも横ナデにより仕上げられている。

甕Eeは8～10の3個体である。3個体とも体部内面がヘラ削りにより仕上げられ、外面中位が斜方向を基調とした、上位が縦方向を基調としたハケにより仕上げられている。その後、口縁部内面が横方向のハケの後、内外面が横ナデにより仕上げられている。体部は、底部付近に最大径を有する球形をなしている。9についても、体部内面が横方向のヘラ削り、外面が縦方向を主体としたハケにより仕上げられ、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。10は、体部内面が横方向のヘラ削り後、斜方向のヘラナデにより仕上げられている。体部外面は縦方向を主体としたハケにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

甕Faは12の1個体である。12は、内面が横方向、外面が縦方向のハケにより仕上げられている。

甕Feは14と15の2個体である。2個体とも体部内面が横方向のヘラ削り、外面が縦方向を主体としたハケにより仕上げられ、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。14の口縁部内面については、横ナデは摩滅のため観察できない。15は、体部内面が横方向のヘラ削り、外面が縦方向を主体としたハケにより仕上げられ、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。口縁部内面の横ナデの前には横方向のハケが施されている。

甕Hは11の1個体である。11は口縁部と体部の境が不明瞭である。体部内面は、縦方向のハケの後、体部中位付近を中心縦方向(下→上)のヘラ削りが施されている。体部外面も縦方向のハケにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

製塙土器 16の1点が出土している。体部から口縁部にかけて残存し、内面はナデ、外面は指オサエの後ナデにより仕上げられている。

甕 17の1点が出土している。焚口部の側部から底部にかけての一部で、高さ32.80cm分残存する。上部において底の下部が残存し、その幅は4.40cmを測る。体部外面は縦方向のハケにより仕上げられ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。底についてはナデを基調として仕上げられている。また、底

の端面はヘラナデにより仕上げられている。

須恵器 杯・高杯・壺・甌の各器種が出土している。

杯 18と19の2個体が出土しているが、18は杯e2に、19は杯f4に分類される。底部は、18が回転ヘラ削り後ナデにより仕上げられている。一方、19は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。

高杯 20の無蓋高杯1個体が出土している。無蓋高杯Hfに分類され、杯部のみ残存する。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

壺 21の1個体である。長頸壺と考えられるが、口縁部を欠く。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、体部上半から肩部にかけての外面にはカキ目が施されている。底部は回転ヘラ切り後ナデが加えられている。

甌 22の1点で、底部から体部中位まで残存する。外面は叩き整形後カキ目が加えられている。底部ほど密に施されている。内面には當て具痕が顕著に認められる。

時期 時期を判断できるのは須恵器である。ただし須恵器の18と19をみると、明らかに時期差が認められる。19が住居跡上面で出土しているのに対して、18が下層から出土していることから、18が本住居跡の時期を示すものと考えられる。しがって、南構IV期と位置付けられる(第7章第1節)。一方19については、住居跡廃棄後の時期を示すものと考えられる。

SH02(図版2 写真図版27・56 附表28)

検出状況 第2次調査で検出した住居跡である。南地区の中央部西側で検出されている(第39図)。SH03の西側、SH08の北側に位置する。そしてSH01の東側に隣接する。SH01との関係については、SH01で報告したとおりである。

当住居跡の大半はSH01と重複し、検出できたのは東辺と南北両辺の一部に限られる。検出状況から判断して、全体の約1/4が検出されたものと考えられる。SH01以外、他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

形状・規模 住居跡の平面形については、プランを検出できた3辺から方形であったものと判断される(第44図)。ただし、全体が検出された

東辺については直線的ではない。さらに北辺と

南辺については平行関係ではない。このためかなり歪んだ平面形となっている。

建物の規模は北辺-南辺間で9.60mである。また、その直交方向で最大3m検出されている。主柱穴間(P1-P2)を基準とした棟軸方向はN16°00'Wを示している。床面は比較的平坦で、検出面からの深さは最深部で20cmを測る。また床面の標高は30.80m~30.90mである。

埋土 黒色シルト質極細砂の1層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められた層と考えられる。

屋内施設 主柱穴2穴(P1・P2)が検出されている。これら2穴については北辺・南辺からほぼ同距離にあることから、主柱穴と判断したものである。各柱穴の平面形は、いずれも梢円形傾向にある。埋土は、いずれも黒色極細砂~細砂の1層である。柱痕については、平面・断面ともに確認することはでき



第43図 SH02の検出作業

なかった。

各柱穴の平面規模・床面からの深さは、P 1 が $38\text{cm} \times 30\text{cm}$ ・ 25cm 、P 2 が $34\text{cm} \times 26\text{cm}$ ・ 11cm である。また柱穴間の距離は 5.68m である。

出土遺物 土器器の壺・甕・高坏が出士している。

壺 24の1個体が出土している。壺Cbに分類され、内外面ともハケの後横ナデにより仕上げられている。体部がわずかに残存し、内面はナデ、外面はハケにより仕上げられている。

甕 壺Aaと甕Cfが出土している。

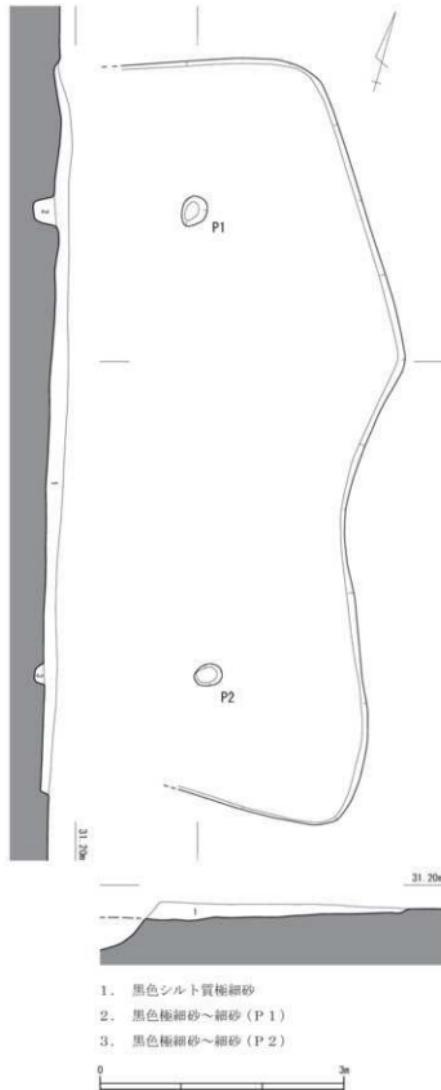
甕Aaは25の1点が出土している。口縁部を中心には残存し、内外面とも横ナデにより仕上げられている。また、頸部内面は横方向のハケにより仕上げられている。

甕Cfは23の1個体である。口縁部のみが残存する。口縁部中央外面が強い横ナデにより段が形成され、複合口縁状をなしている。内外面とも横ナデにより仕上げられ、口縁端部は水平な端面をなしている。

高坏 高坏Dbが出土している。

高坏Dbは26の1点である。坏部下半を中心には残存する。外面には明瞭な段が認められる。外面は口縁部が横方向、坏底部が縱方向のハケ、内面は横方向を主体としたナデにより仕上げられている。坏底部と口縁部の境をなす段は、ヘラによる強いナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構IV期に位置付けられる(第7章第1節)。南構IV期のなかでもより南構III期に近い時期と考えられる。



第44図 SH02

SH03(図版2 写真図版28 附表28)

検出状況 第2次調査で検出した住居跡である。南地区の中央部や北側で検出されている(第39図)。

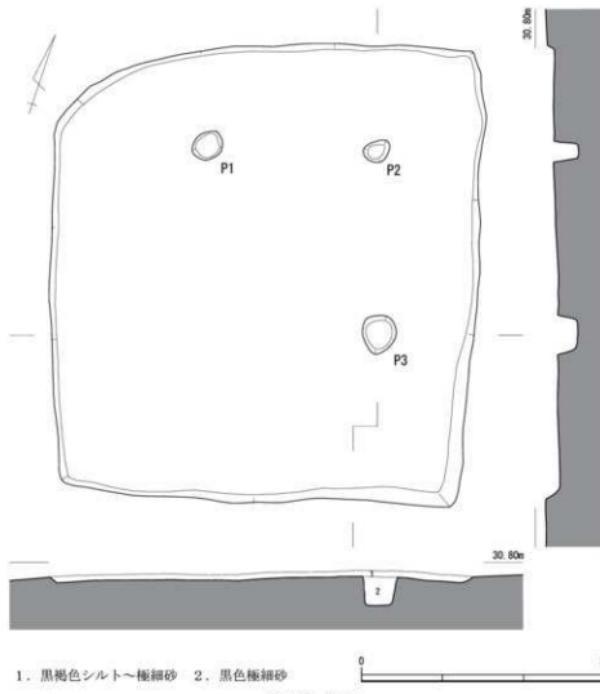
SH04の北側、SH02の東側に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。このため、本住居跡はほぼ全体が検出されている(第45図)。

形状・規模 住居跡の平面形は、東辺と西辺が平行関係にあり、かつ南辺とは直角関係にあり、方形をなしている。ただし、北辺の西側が弧状をなしている。居跡の規模は、東辺で5.62m、南辺で4.90mを測り、両辺を基準とした床面積は27.53m²となる。またP2-P3間を基準とした棟軸方向はN20°Wを示している。床面はほぼ水平な面をなし、検出面からの深さは8cm-18cmを測る。床面の標高は30.50m前後である。

埋 土 黒褐色シルト～極細砂1層が堆積していた。層相から判断して、人為的に埋められた層と考えられる。

屋内施設 主柱穴が3穴(P1～P3)検出されている。この3穴については、北辺・東辺から同距離にあり、直角関係にある。当初は4穴であったと考えられるが、南西側の1穴を検出することはできなかつた。

P1は、平面形が径35cmの円形をなし、床面からの深さは24cmを測る。柱穴内から、31の須恵器が出



第45図 SH03

土している。P2は、平面形が35cm×25cmの楕円形をなし、床面からの深さ30cmを測る。P3は平面形が42cm×46cmの楕円形をなし、床面からの深さは24cmを測る。また主柱穴間の距離は、P1-P2間で2.10m、P2-P3間で2.25mを測る。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 高坏と脚部が出土している。

高坏 高坏Ddと高坏Bdが出土している。

高坏Ddは27の1個体である。口縁部は強い横ナデにより外方につまみ出されている。体部外面は横ナデ、内面は斜方向のハケにより仕上げられ、最後に放射方向の暗文が施されている。

高坏Bdは28の1個体である。坏上半部を中心に残存する。外面は縱方向のハケの後、横ナデにより仕上げられている。内面は横ナデの後縱方向のヘラミガキにより仕上げられ、その後放射方向の暗文が加えられている。最後に口縁端部が横ナデにより仕上げられている。

脚部 2個体(29・30)出土している。29は高杯の脚部と考えられる。「ハ」の字形に開き、円形の透かしが1か所残存する。外面は、上半が縱方向の、下半が横方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面は、上半がヘラナデ、下半が横ナデにより仕上げられている。

30は小型器台の可能性が考えられる。内面は指ナデにより仕上げられている。外面については摩滅のため観察できない。

須恵器 杯が1点(31)出土している。杯a1に分類される。体部から口縁部にかけて残存し、内外面とも回転ナデにより仕上げられ、口縁端部は内傾する端面をなしている。

時期 出土した須恵器が主柱穴の抜き取り後と考えられる。須恵器の杯a1(31)・高杯Bd(28)・同Dd(27)から南構IV期に位置付けられる(第7章第1節)。

SH04(図版2 写真図版28・57 附表28・29)

検出状況 第2次調査で検出した住居跡である。南地区的中央部や北側で検出されている(第39図)。SH03の南側、SH05の西側、SH08の北東側に位置する。一部が柱穴に切られているが、全体が検出されている。

形状・規模 住居跡の平面形は長方形をなす(第46図)。ただし、北辺と南辺が西辺・東辺に対して斜行し、平行四辺形傾向にある。住居跡の規模は、西辺と東辺が平行し、その間の規模は5.13mを測る。南北方向については最大で4.30mを測り、床面積は22.05m²である。東辺を基準とした棟軸方向はN17°30'Wを示している。床面はほぼ平坦面をなし、検出面からの深さは10cm~15cmである。また床面の標高は30.55m前後である。

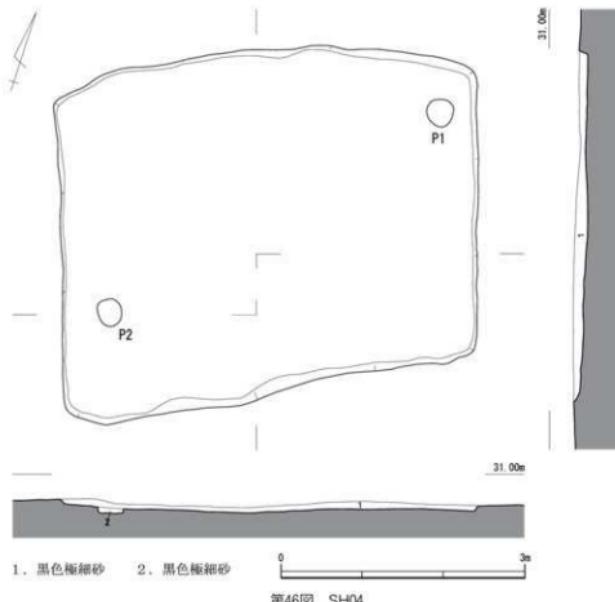
埋 土 黒色極細砂1層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

屋内施設 主柱穴が2穴(P1・P2)検出されている。P1は住居跡北東隅にあり、径31cm、床面からの深さ6cmを測る。P2は住居跡南西隅にあり、径30cm、床面からの深さ5cmを測る。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。36を除いては床面直上から出土している(第47図)。各個体が点在する形で出土しており、住居跡が機能していた時期の資料と考えられる。

土師器 壺と高坏が出土している。

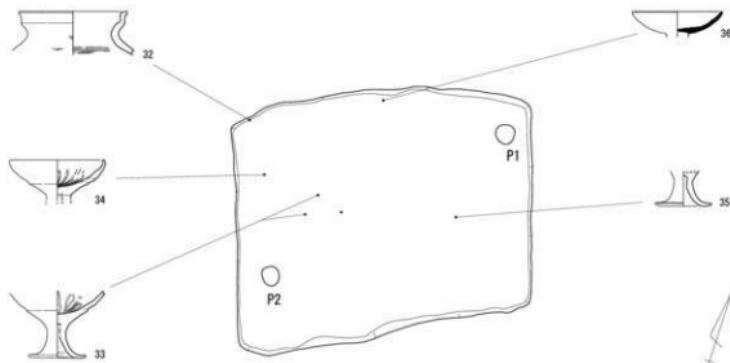
壺 32の1点が出土している。壺Ccに分類され、肩部から口縁部にかけて残存する。口縁部は複合口



第46図 SH04

縁状をなし、体部内外面を横方向のハケの後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

高坏 33~35の3点出土している。33は口縁部を欠くが高坏Dに分類され、高坏DaもしくはDbに細分されるものと考えられる。坏部は内外面とも横ナデにより仕上げられ、内面には暗文が施されている。上下方向に往復する暗文が連続して描かれている。脚部は、脚柱部外面が縱方向のヘラナデ、内面上半が横方向のヘラナデ、下半が横方向のヘラ削りにより仕上げられ、その後裾部内外面が横ナデより仕上



第47図 SH04土器出土位置

げられている。

35は高杯Deに分類される。内外面の調整は基本的に33と同じである。内面の暗文も同様であるが、杯底部付近に横方向の暗文が最初に施されている。

34は脚部のみ残存する。脚柱部外面を縦方向のヘラナデ、裾部を指オサエ後、全体的にナデにより仕上げられている。内面は、中位から下位にかけてが横方向の強いヘラナデ、裾部が弱い横方向のヘラナデにより仕上げられている。最後に脚端部内外面が横ナデにより仕上げられている。

須恵器 高杯の36の1個体が出土している。無蓋高杯Hgに分類される個体である。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、内面底部には仕上げナデが加えられている。また、杯部下半には回転ヘラ削りが加えられている。杯底部下面は接合面で剥離した状態となっている。

時期 出土遺物、特に土師器の示す特徴から南構IV期と考えられる(第7章第1節)。

SH05(図版2・73 写真図版184 附表29・100)

検出状況 第6次調査で検出された住居跡である。南地区の中央部東側で検出されている(第39図)。

SH04の東側に位置する。SH04とは切り合い関係にあり、SH06に切られている(第48図)。このため、住居跡の東側については検出することはできなかった。

形状・規模 住居跡の平面形は、方形もしくは長方形をなすものと考えられる(第48図)。その規模は、南北方向で4.45mを測り、その直交方向で3.45m検出している。北壁の直交方向を基準とした棟軸方向はN24°30'Wを示している。床面は基本的に平坦で、中央部における標高は29.85mである。また、検出面からの深さは最大で50cmを測る。

埋 土 黒褐色シルト1層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められた層と考えられる。

屋内施設 主柱穴等、何も検出されていない。

出土遺物 土器と石器が出土している。

土 器 土師器と須恵器が出土している。

土師器 杯と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。杯は口縁部片が数片出土している。甕は、口縁部から体部にかけて残存するものと、体部片が出土している。前者は甕Ecに分類されるもので、体部の特徴から長胴甕と考えられる。体部片は、内面がヘラ削り、外側がハケにより仕上げられている。

須恵器 怀蓋が1個体(37)出土している。口縁部を中心には残存し、詳細な分類は不明である。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

石 器 台石が2点(S1・S2)出土している。2点とも自然石を利用したものである。

S1は一部のみ残存する。厚さ11.50cm以上を測り、1面は台石としても使用されている。また側面には、砥石として使用されたと考えられる使用痕が2箇所で認められ、砥石としても使用されている。

S2も一部を欠く。厚さ6.50cmの扁平な石材が使用されている。上面は平坦な面をなし、摩耗痕が認められる。また、その裏面には弧状をなすが磨き痕が認められる。

時期 出土土器、特に出土須恵器の特徴から南構VI期と考えられる(第7章第1節)。 土師器の杯については、埋没時期を示しているものと考えられる。

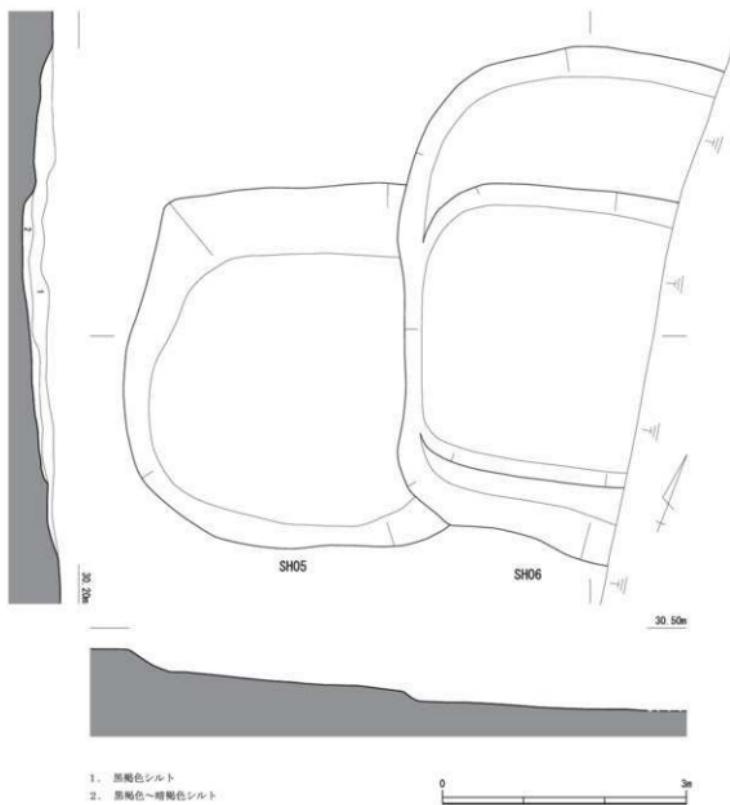
SH06(写真図版29)

検出状況 第6次調査で検出された住居跡である。南地区の中央部東側で検出されている(第39図)。SH05と切り合い関係にあり、SH05を切っている(第48図)。住居跡の東側については調査区外まで拡がっており、全体を検出することはできなかった。

形状・規模 住居跡の平面形は、方形もしくは長方形をなすものと考えられる(第48図)。その規模は、南北方向で6.30mを測り、その直交方向で4.00m検出している。西壁を基準とした棟軸方向はN $14^{\circ} 30'$ Wを示している。床面は基本的に平坦で、中央部における標高は29.50mである。また、検出面からの深さは最大で70cmを測る。

埋 土 上から黒褐色シルト、黒褐色～暗褐色シルトの2層からなる。その層相から判断して、両層とも人為的に埋められた層と考えられる。

屋内施設 高床部が検出されている。北辺側と南辺側で検出され、西辺側では検出されていない。北側



第48図 SH05・SH06

については最大幅1.40mを測り、検出面との比高は25cm、床面との比高は14cmである。南側については最大幅45cmを測り、検出面・床面との比高はそれぞれ10cmである。

出土遺物 土師器と須恵器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

土師器は壺の口縁部片と体部の小片が出土している。口縁部片は複合口縁をなすものである。

須恵器は杯蓋の口縁部片と壺の体部片が出土している。

時期 特にSH05との切り合い関係から、南構VI期の範疇で理解できるものと考えられる。

SH07(写真図版29)

検出状況 第1次調査で明らかとなった住居跡である。南地区のほぼ中央部西端で検出されている(第39図)。SH01の南西側、SH09の北側、SH08の西側に位置する。住居跡の西側は調査区外に扯がり、検出できたのは全体の1/2強と想定される。さらに住居跡南側の一部は土壤に切られている。

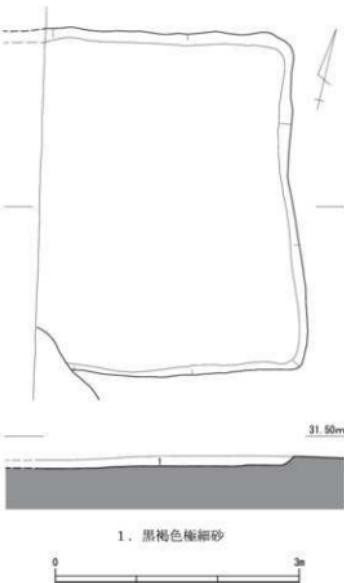
形態・規模 住居跡の平面形は、検出した範囲から方形をなすものと考えられる(第49図)。住居跡の規模は、南北方向で4.25mを測り、その直交方向で3.30m検出している。北辺の直交方向を基準とした棟軸方向はN12°30'Wを示している。床面はほぼ水平な面をなし、検出面からの深さは10cmである。床面の標高は31.10m~31.15mである。

埋土 黒褐色極細砂1層が堆積していた。その層相から人為的に埋められたものと考えられる。

屋内施設 主柱穴・壁溝などは検出されていない。

出土遺物 土師器と須恵器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。土師器は、壺Eの口縁部片が出土している。長胴タイプと考えられる。須恵器は杯蓋の天井部片が出土している。

時期 土師器から南構VI期と考えられる(第7章第1節)。



第49図 SH07

SH08(写真図版29)

検出状況 第2次調査で検出した住居跡である。南地区の中央部西側で検出されている(第39図)。SH01・SH02の南東側、SH07の東側、SH10の北側に位置する。住居跡全体が検出されており、他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

形態・規模 住居跡の平面形は長方形をなす(第50図)。ただし、南辺と北辺および西辺と東辺はそれぞれ平行関係にあるが両者は直角関係ではなく、全体的に平行四辺形傾向にある。また西辺と東辺は直線的であるに対して、北辺と南辺はやや屈折傾向にある。建物の規模は、西辺-東辺間で8.90m、北辺-南辺間で7.00mである。両者を基準とした面積は62.30m²となり、報告する住居跡のなかでは最大規模である。

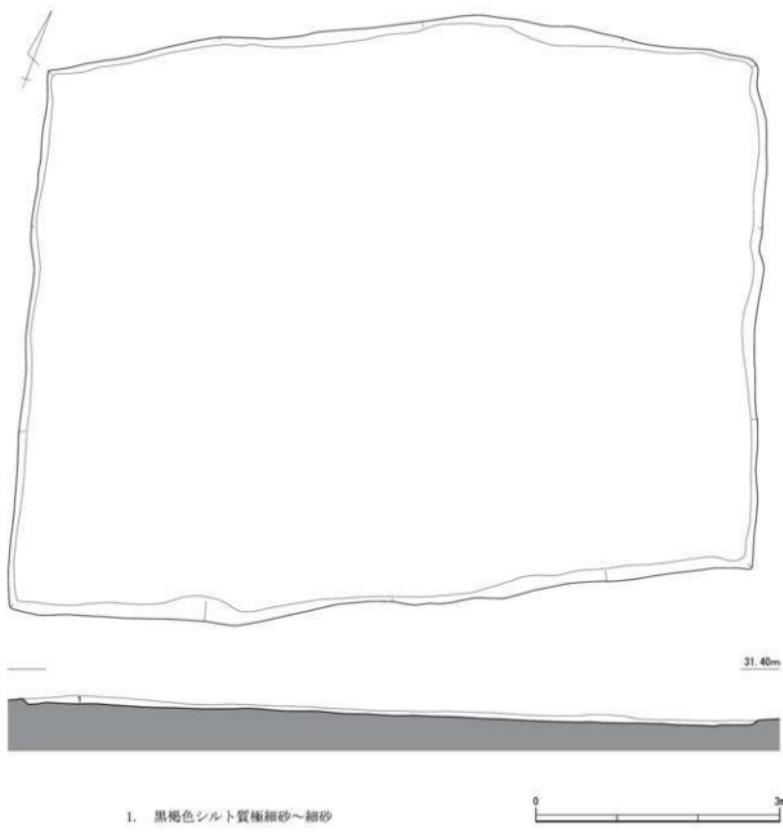
ある。西辺を基準とした棟軸方向はN16° 30' Wを示している。床面は平坦で、検出面からの深さは6cmを測る。床面の標高は30.70mから31.00mである。

埋 土 黒褐色シルト質極細砂～細砂の1層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められた層と考えられる。

屋内施設 主柱穴・壁溝などは検出されていない。

出土遺物 土師器と須恵器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。土師器は、甕の体部片が出土している。外面がハケ、内面がヘラ削りにより仕上げられている。須恵器は杯B蓋が出土している。

時 期 杯B蓋については当住居跡の埋没時期を示すものと考えられる。建物の示す方位がSH03・SH04と同じであることから、南構Ⅳ期の可能性が考えられる(第7章第1節)。



SH09(図版2・3・73 写真図版30・57・58・184 附表29・100)

検出状況 第1次調査で明らかとなった住居跡である。南地区のはば中央部西側で検出されている(第39図)。SH07の南側、SH10の西側に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、住居跡全体が検出されている。

形状・規模 住居跡の平面形は台形状をなしている(第51図)。これは、当初は方形をなしていたものと考えられるが、南東部における調査過程で住居跡プランを十分確認できなかったことによるものと考えられる。北辺と西辺が本来の平面プランを表しているものと考えられる。住居跡の規模は、南北方向で4.68m、その直交方向で4.50mを測る。これを基準とした床面積は21.06m²である。西辺を基準とした棟軸方向はN13°Wを示している。床面はほぼ水平面をなし、検出面からの深さは10cmである。床面の標高は31.25m~31.28mである。

埋土 黒色極細砂～細砂と黒褐色極細砂の2層が堆積していた。2層ともその層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

屋内施設 主柱穴・壁溝などは検出されていない。

出土遺物 土器と石器が出土している。

土器 土師器と須恵器が出土している(図版2・3)。

土師器 壺・高坏・甕が出土している。

壺 壺Cg・壺Ga・壺Ec・壺Edが出土している。

壺Cgは38の1個体である。口縁部は内外面とも横ナデにより、体部内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

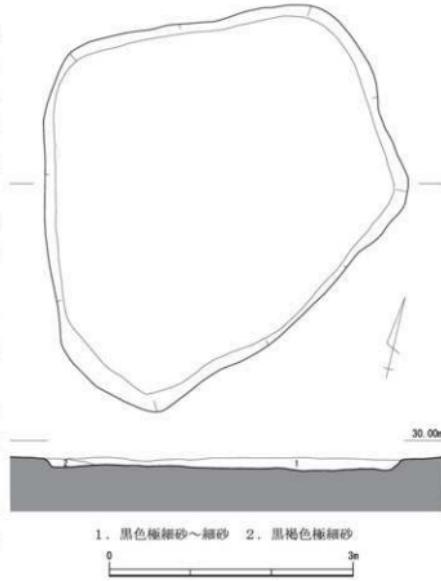
壺Gaは39と40の2個体である。体部に対して口縁部が横ナデにより短く外反する点が特徴的である。体部は、外面が縱方向のハケ、内面が横方向(左→右)のヘラ削りにより、それぞれ仕上げられている。

壺Ecは42と43の2個体である。体部から口縁部にかけての外面を縱方向の、口縁部内面を横方向のハケの後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。体部内面は横方向のヘラ削り(左→右)により仕上げられている。

壺Edは44の1個体である。口縁部が屈曲傾向にある以外、壺Ecと特徴は同じである。

高坏 41の1個体である。高坏Eに分類され、内外面とも横ナデにより仕上げられている。

甕 45の1点が出土している。底部



第51図 SH09

の小片である。内外面ともナデを基調として仕上げられている。底下面にはハケ目がわずかに残存している。

須恵器 杯蓋・杯・高杯・甕が出土している。甕については体部片が多数出土しているが、図化できなかった。

杯蓋 46の1個体が出土している。杯蓋は分類され、天井部の2/3が比較的弱い回転ヘラ削りにより仕上げられ、一部指オサエが認められる。内面には多方向の仕上げナデが認められる。

杯 47と48の2個体が出土している。47は底部が回転ヘラ削りにより仕上げられている。48は杯c8に分類されるが、底部については顕著な灰被りにより観察できない。

高杯 49の1個体が出土している。無蓋高杯は分類され、内外面とも回転ナデにより仕上げられていている。

石 器 砥石(S3)が出土している。S3は比較的扁平な自然石を利用したもので、扁平な面と側面の2面で使用痕が認められる。使用痕は顕著である。

時期 出土遺物から南構VI-1期と考えられる(第7章第1節)。

SH10(図版3 写真図版30・58 附表29・98)

検出状況 第2次調査で検出した住居跡である(第52図)。南地区の中央部西側で検出されている(第39図)。SH08の南側、SH09の東側、SH11の北西側に位置する。検出した範囲は北辺と東辺に限られ、両辺とも部分的な残存にとどまる。この結果、検出できた範囲は全体の約1/3と考えられる。なお、他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。



第52図 SH10の検出作業

形状・規模 住居跡の平面形は方形をなしていたものと考えられるが、北辺と東辺が鈍角

をなし、台形もしくは平行四辺形傾向にある(第53図)。住居跡の埋土が検出された範囲は、東西方向で3.20m、南北方向で5.00mに限られる。北辺・東辺とも全体が残存していないため、建物の規模を明確にすることはできない。北辺で3.60m、東辺で5.60m残存する。東辺を基準とした棟軸方向はN30°Wを示している。床面は平坦で、検出面からの深さは最大で28cmを測る。床面の標高は30.90mである。

埋 土 黒褐色極細砂～細砂の1層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められた層と考えられる。

屋内施設 主柱穴・壁溝などは検出されていない。

出土遺物 土器と土製品が出土している(図版3)。

土 器 土師器と須恵器が出土している。ただし、土師器については小片のため図化できなかった。

土師器 甕の口縁部を中心とした小片が出土している。残存する状況から長胴タイプの甕である。

須恵器 杯蓋と杯が出土している。

杯蓋 50と51の2個体が出土している。50は杯蓋Y4に、51は杯蓋Y6に分類され、2個体とも天井部の1/3が回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。また51は全体的に歪みが顕著である。

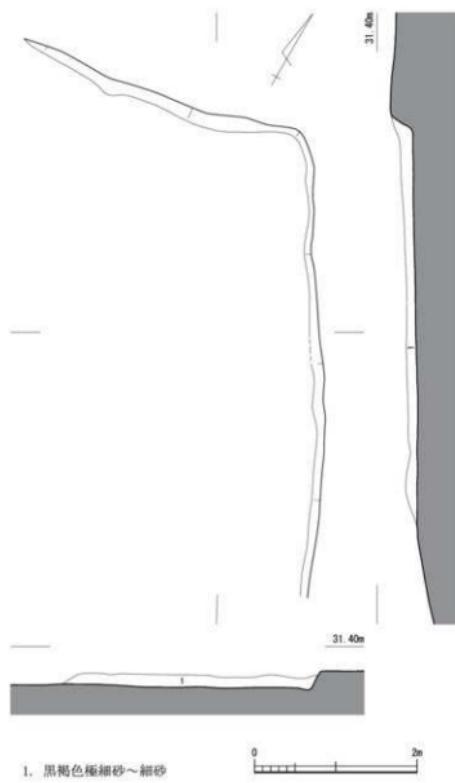
杯 52と53の2個体が出土している。

52はほぼ完存する個体で、杯&に分類される。内外面とも回転ナデを基調として仕上げられている。底部は、外面に回転ヘラ切り後ナデが加えられている。内面には2方向の仕上げナデが認められる。

53は杯oに分類され、底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反している。体部から口縁部にかけては器壁が比較的薄く仕上げられている。内外面とも回転ナデを基調とし、底部外面は丁寧な回転ヘラ削りにより仕上げられている。底部内面には2方向の仕上げナデが加えられている。

土製品 土錐が1点(54)出土している(附表98)。両端はヘラにより切られ、外面は全体的にハケにより仕上げられている。ハケは螺旋状に施されている。

時期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第53図 SH11

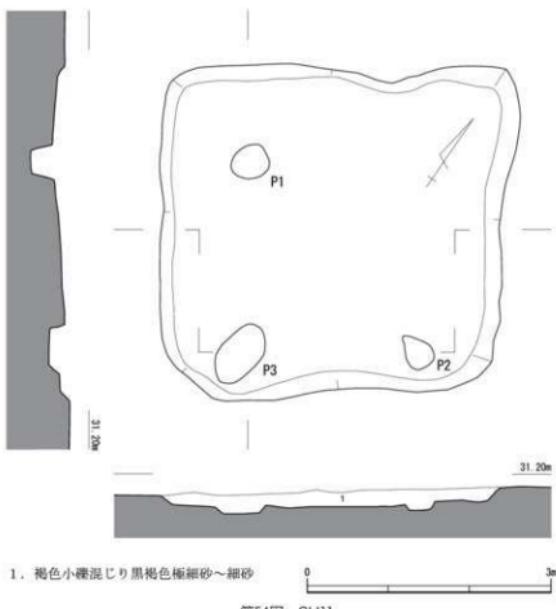
SH11(図版3 写真図版31 附表29)

検出状況 第1次調査で検出された住居跡である。南地区のはば中央部で検出されている(第39図)。SH10の南東側、SH12の北西側に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、住居跡全体が検出されている。

形状・規模 住居跡の平面形は方形をなす(第54図)。北西-南東主軸ライン上で4.10m、その直交方向で4.20mを測る。また、これを基準とした面積は17.22m²である。北西-南東主軸ラインを基準とした棟軸方向はN34°Wを示している。床面はほぼ水平な面をなし、検出面からの深さは20cmである。また、床面の標高は30.80m~30.90mである。

埋 土 褐色小砾混じり黒褐色極細砂～細砂1層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

屋内施設 主柱穴が3穴(P1~P3)検出されている。P1を除いては、全体的に歪んだ平面形をなしている。各柱穴の規模は、P1が47×38cm、P2が45×35cm、P3が80×46cmである。主柱穴間の距離は、



P2-P3間が2.20m、P1-P3間が2.30mである。

この他、住居跡のはば中央部床面直上で焼土を確認している。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 高壺・甕・把手が出土している。ただし、高壺と甕については小片のため図化できなかった。

高壺 壺部片と脚部片が出土している。壺部片の内面には暗文が認められる。脚部は脚端部が残存し、赤色に仕上げられている。

甕 甕Ecに分類される口縁部片が出土している。比較的大型の甕である。

把手 56の1点に限られる。平面舌状をなすタイプで、全体が指オサエにより仕上げられている。

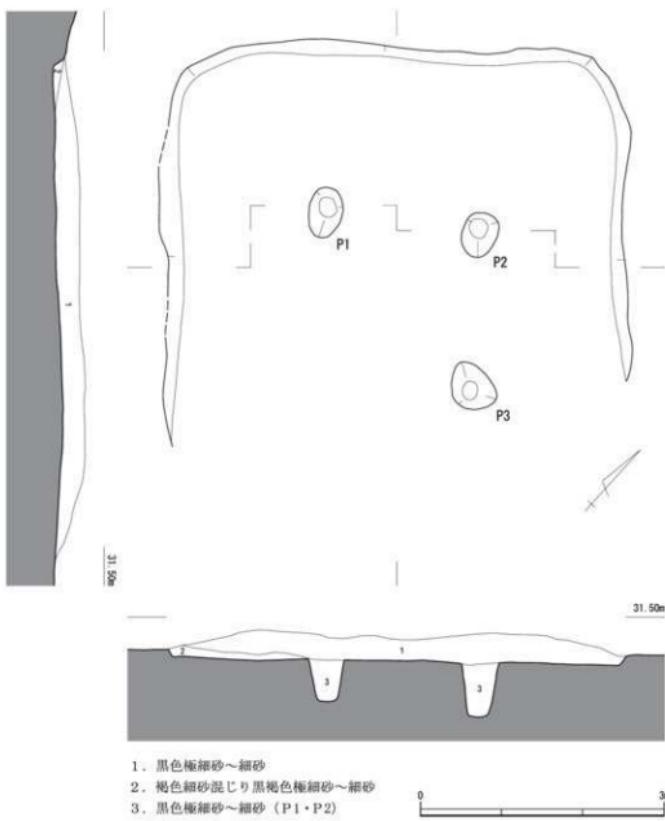
須恵器 杯蓋と杯が出土している。杯蓋については小片のため図化できなかった。杯の55は口縁部を中心にはざむかに残存する。口縁部の立ち上がりはわずかである。

時 期 出土遺物から南構VI期と考えられる(第7章第1節)。

SH12(図版3~5・74 写真図版31・58~63・185 附表29~31・100)

検出状況 第1次調査で検出された住居跡である。南地区の中央部や南側で検出されている(第39図)。SH11の南東側、SH13の北西側に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

なお当住居跡を検出するにあたっては、検出した3辺の内側が多量の土器を含む層であり、これを当住居跡の埋土と判断した。この結果、住居跡中央部付近では、3辺を確認したレベルより高いレベルで住居跡埋土上面として調査を行っている。このため、実際には明確なラインを確認することはできな



かった。以上から、南東辺については明確なラインを検出できていない。

形状・規模 住居跡の平面形は、検出した3辺が平行・直角関係にあるため、比較的整った方形をなしている。ただし、北西-南東方向の土層から判断すると、南東方向にさらに住居跡の範囲が拡がるものと考えられる。

住居跡の規模は、南西-北東方向で5.65mを測る。その直交方向については北西辺で4.40m検出しているが、土層断面から6.20mとなる(第55図)。この規模は、主柱穴と住居跡掘方との位置関係からも、妥当なものと考えられる。当該規模から、住居跡の最大床面積は35.03m²となる。北東辺を基準とした棟軸方向はN42°Wを示している。

床面はほぼ水平面をなし、検出面からの深さは15cmである。ただし住居跡中心部では最大30cmを測る。床面の標高は31.00m前後である。

埋 土 黒色極細砂～細砂と褐色細砂混じり黒褐色極細砂～細砂の2層が堆積していた。前者が大半

で、後者については住居跡西部肩部付近を中心に認められた。いずれも、層相から判断して人為的に埋められた層と考えられる。

屋内施設 主柱穴が3穴(P1～P3)検出されている。3穴とも居跡肩部より内側にある傾向が認められる。当初は4穴からなるものと考えられるが、南隅の1穴を検出することはできなかった。

P1は住居跡西隅にあり、平面形は42cm×62cmの楕円形をなす。床面からの深さは51cmを測る。P2は住居跡北隅にあり、42cm×55cmの楕円形をなす。床面からの深さ63cmを測る。P3は住居跡東隅にあり、平面形は50cm×63cmの楕円形をなす。床面からの深さは41cmを測る。主柱穴間の距離は、P1～P2間で1.85m、P2～P3間で2.00mである。

出土遺物 土器・土製品・石器が出土している。

土器 土師器と須恵器が出土している。北隅付近と南隅付近からまとまって出土している(第56図)。いずれも、住居跡を確認した段階で明らかとなつた土器で、少なくとも床面直上から出土したものではない。まず北隅からは、57・66・74・75・84・90・96・116が出土している。特に57・74・84・96は一括で出土している。次に南隅からは58・65・67・69・78・80～83・100・109・110・112～114が一括で出土している。良好な一括資料と考えられる。

このほか、住居跡中央部を中心に多くの土器が出土している。これらの土器は、先に紹介した資料より下層からの出土である。

土師器 壺・甕・杯・高环が出土している。

壺 壺Ba・壺Bc・壺Cd・壺Ce・壺D・体部片が出土している。

壺Baは63の1個体である。肩部から口縁部にかけて残存し、口縁部は横ナデにより大きく外反傾向にある。肩部は、外面が縱方向のハケの後ナデ、内面が横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

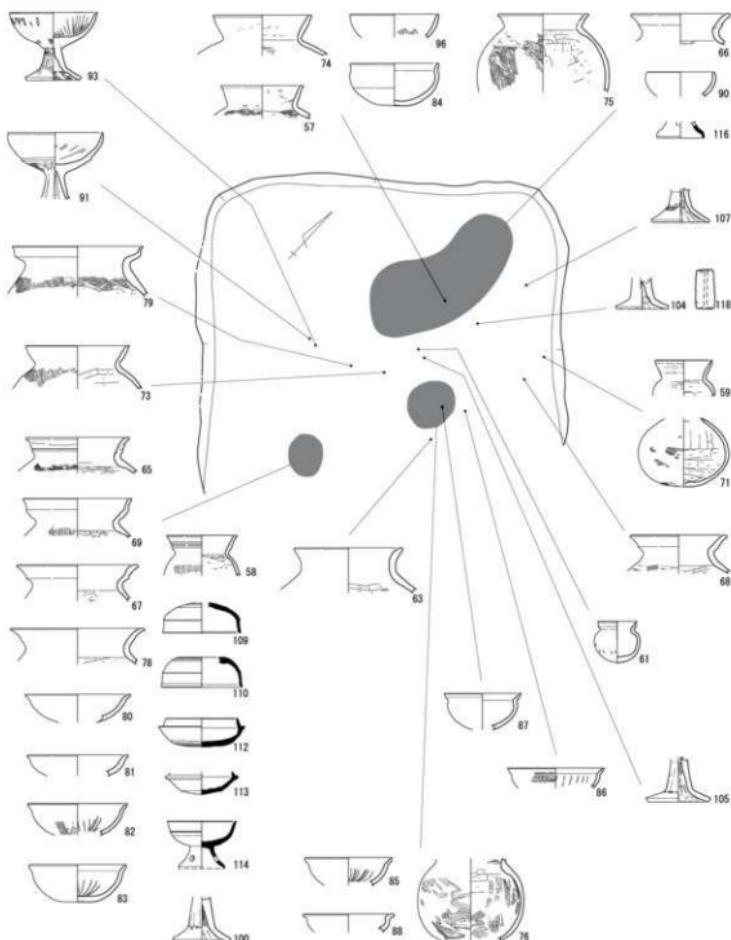
壺Bcは57の1個体である。57は体部に対して口縁部が斜方向に直線的にのびていて、端部は横ナデにより外方につまみ出されている。この結果、水平な端面が形成されている。体部から口縁部にかけての外面および頸部から口縁部内面はハケにより仕上げられ、その後横ナデが加えられている。また体部内面には横方向のヘラ削りが認められる。

壺Cdは58の1個体である。球形の体部に口縁部が斜上方にはば直線的にのびていて、体部外面をハケ、内面をヘラ削り後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。横ナデの際の指先の当たりが強く、口縁部外面は四線状をなしている。

壺Ceは59の1個体である。59は球形の体部に口縁部が直線的にのびていて、端部が横ナデにより上方に摘まみあげられている。体部外面がハケの後ナデ、内面がヘラ削り後ナデより仕上げられ、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

壺Dは60～62の3個体である。60は、球形の体部に対して口縁部が短く外反している。体部外面はハケの後ナデ、内面は横方向のヘラナデと指オサエにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。61はほぼ完存する個体である。体部は球形をなし、底部は丸底をなしている。大きく外反する頸部に対して、口縁部が横ナデにより直立している。体部外面はナデ、内面は底部付近がヘラナデ、中位以上が横ナデにより仕上げられている。体部外面には爪形の圧痕が多く認められる。62は、外面がハケとナデ、内面が横方向の指ナデにより仕上げられている。頸部内外面は横ナデにより仕上げられている。

体部片は71と72の2点が出土している。71は、頸部を除いた体部全体が観察できる資料である。ほぼ



第56図 SHI12土器出土位置

球形をなすが、わずかに下彫れ傾向にある。外面はハケ、内面は下半が横方向のヘラ削り、上半が縦方向のヘラナデにより仕上げられている。内面のヘラナデについては、その単位を明確に観察することができる。

72は71に対して縦長傾向にある体部片で、底部には径2.0cm～2.75cmの穿孔が認められる。穿孔は焼成前と考えられる。外面は全体的に摩減傾向にあるが、指オサエとナデ痕を観察することができる。内面は横方向のヘラナデにより仕上げれている。また、頭部付近はナデにより仕上げられている。

甕 甕Ab・甕Cc・甕Cd・甕Cg・甕Ec・甕Ed・甕Eeが出土している。

甕Abは73と74の2個体である。口縁部は外端部を中心とした横ナデにより、水平な端面をなしている。いずれも口縁部は内外面とも横ナデにより仕上げられている。体部は、外面がハケ、内面がヘラ削りにより仕上げられている。

甕Ccは79の1個体である。体部外面をハケ、内面をヘラ削り後ハケの後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。また外面全体に煤の付着が認められる。

甕Cdは64・67・69・70の4個体である。いずれも口縁部を中心に残存する。口縁部中位に段が認められる点が共通した特徴で、いずれも内外面とも横ナデにより仕上げられている。頭部整形後新たに粘土を繰り足し、この箇所が段となっている。また、体部内面はいずれも横方向のヘラ削りにより仕上げられている。さらに69の体部外面は、ハケにより仕上げられている。この他64の内面の一部には横方向のハケを観察することができる。

甕Cgは65・66・68の3個体である。口縁部中位に段が認められ、いずれも内外面とも横ナデにより仕上げられている。65と68の体部外面はハケにより仕上げられている。

甕Ecは77の1個体である。口縁部は内外面とも横ナデにより仕上げられている。体部外面はハケ、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

甕Edは78の1個体である。口縁部は内外面とも横ナデにより仕上げられている。体部外面はハケ、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

甕Eeは75の1個体である。口縁部は内外面とも横ナデにより仕上げられている。体部外面はハケ、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

体部片は76が出土している。体部は球形をなすものと考えられるが、底部と頭部以上を欠いている。外面はハケの後斜方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面は縱方向のヘラ削り後同方向のハケにより仕上げられている。また、頭部付近内外面は横ナデにより仕上げられている。体部外面がヘラミガキにより仕上げられていることから甕の体部の可能性も考えられるが、体部中位以下に煤の付着が認められることから甕と判断している。

杯 杯Cbと杯Ccが出土している。ただし80~82・85~87の6個体については底部を欠くため、高坏の可能性を残すものである。

杯Cbは82~88の7個体が該当する。口縁部は、内外面を摘むような横ナデにより外反している。体部外面は、83と84がナデにより、85と87がナデと指オサエにより、82が縱方向のハケにより、86が横方向のヘラミガキにより、それぞれ仕上げられている。内面は横ナデを基調とし、器面の残存状況の良好な82・83・85・86には放射方向の暗文が施されている。83と84はわずかに底部を意識した様子が認められ、83の底部外面はヘラナデにより仕上げられている。この他、84の内外面には赤彩が認められる。88は内外面とも横ナデにより仕上げられている。

杯Ccは80と81の2個体である。80は、体部外面がナデ、内面は横ナデにより仕上げられている。

高坏 高坏Bc・高坏Bd・高坏Cb・高坏Cc・高坏Dc・高坏Ddが出土している。

高坏Cbは93の1個体である。93は、坏部から脚部まで比較的良好に残存する個体である。坏部はわずかに有稜タイプに近い傾向を伺うことができる。坏部外面は、縱方向のハケの後ナデが加えられている。内面は、体部から口縁部にかけて斜方向の暗文を施文後、坏底部にジグザグ状の暗文が施されている。いずれの暗文とも細筋である。脚部は、外面を縱方向のハケの後、縱方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面は、脚柱部が横ナデ、脚裾部が横方向のハケにより仕上げられている。

高坏Ccは90・94~96の4個体である。ただし、90については法量的に小型であることから、鉢の可能性も否定できない。90・95・96は、内外面とも横ナデを基調として仕上げられている。95と96の内面、底部付近にはハケ目が認められる。94も内外面とも横ナデを基調とし、内面には縦方向の暗文が認められる。

高坏Daは92の1個体である。坏部内外面は横ナデを基調として仕上げられ、内面には縦方向の暗文が施されている。坏底部外面は縦方向のハケにより仕上げられている。

高坏Dbは91の1個体である。坏部内外面は横ナデを基調として仕上げられ、内面には縦方向の暗文が施されている。坏底部外面は縦方向のハケにより仕上げられている。脚柱部は、外面が縦方向のヘラナデ、内面が横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

高坏Ddは97の1個体である。口縁端部は外面を摘まむような横ナデにより、わずかに外反している。坏部は内外面とも横ナデを基調とし、その後内面には放射状の暗文が施されている。暗文の施文は、反時計回りに行われている。坏部と脚部の接合部付近外面は縦方向のナデと指オサエにより仕上げられている。なお脚部は残存しないが、その接合痕から、脚柱部が坏部を貫通していると理解できる。

高坏Bcは99の1個体である。99は坏部全体が残存し、坏底部から坏部への屈曲は緩やかで、明瞭な稜は認められない。外面は横ナデ、内面はヘラミガキを基調として仕上げられている。内面のヘラミガキは、底部が縦方向、口縁部が斜方向に、全体的に丁寧に施されている。

高坏Bdは98の1個体である。外面は縦方向のハケの後、内面は横方向のハケの後、内外面が横ナデにより仕上げられている。坏部内面下半は、ハケの後縦方向のナデにより仕上げられている。

脚部は89・100~108の10個体である。坏部との対応関係については明確にできない。

89は脚部を中心に残存する。短脚で、脚端部を下方に屈折させ、須恵器高杯の脚部に類似する。脚部は内外面とも横ナデにより仕上げられ、坏底部にはヘラミガキの痕跡がわずかに認められる。

100~107は、脚柱部に対して裾部が「ハ」字形に屈曲気味に開き、裾端部はナデにより端面を有する。外面はいずれも、脚柱部が縦方向のヘラナデ、裾部が横方向のナデにより仕上げられている。103についても、ヘラナデの前にハケが施されている。内面は、脚柱部が絞り痕、裾部がナデおよび丁寧な指おさえにより仕上げられている。

また、102は坏底部の一部が残存し、坏部と脚部は脚部を坏部に挿入させた接合となっている。内面には縦方向の暗文が認められる。103についても同様の接合法を確認することができる。この他106の裾部内面には布目が認められる(第57図)。

108については裾部が大きく開く特徴が認められ、100~107とは異なるものと考えられる。外面はナデを基調とし、部分的にヘラミガキ痕が認められる。内面は、上部が横方向のヘラ削り、裾部が横ナデにより仕上げられている。

須恵器 杯蓋・壺蓋・杯・高杯が出土している。

杯蓋 109と111は杯蓋bに分類される。109の天井部は回転ヘラ削りにより仕上げられ、その範囲は1/3から2/3に及んでいる。111についても天井部の回転ヘラ削りをわずかに観察することができ、その範囲は2/3に及んでいる。

壺蓋 110の天井部は回転ヘラ削りにより仕上げられ、その範囲は1/3から2/3に及んでいる。



第57図 106内面布目

杯 112と113の2個体が出土している。112は杯hに分類される。底部の回転ヘラ削りは2/3の範囲におよび、その後中央部の1/2にナデが加えられている。底部内面は仕上げナデが加えられている。113は口縁部を欠く。

117は杯xに分類され、比較的浅い杯部に対して高さ1cmの高台が貼り付けられている。底部外側がナデによる以外、回転ナデにより仕上げられている。

高杯 114~116の3個体が出土している。114は無蓋高杯Baに分類される。脚端部を欠く以外、全体が観察できる個体である。杯部は、内湾傾向にある体部に対して口縁部がわずかに外反傾向にある。体部と口縁部の境の外側には断面三角形の突帯が1条認められる。高さ1mmとわずかな突帯である。脚部には径1cmの円形の透かしが2箇所に穿たれている。当初は3箇所に穿たれていたものと考えられる。内外面とも回転ナデを基調として仕上げられているが、体部外側上半部には回転ヘラナデが施されている。杯部内面には仕上げナデが認められる。

115は接合部を中心に残存する。内外面とも回転ナデを基調としているが、杯部下端外側は回転ヘラ削りにより仕上げられている。杯部内面には仕上げナデが認められる。

脚部 116は脚Acに分類され、脚端部を中心には残存する。端部は下方に屈曲し直立傾向にある。一部に方形透かしの一部が1箇所認められる。当初の透かしの数は復元できない。

土製品 土塹が1点(118)出土している(図版98)。完存する個体で、全般的に手づくねにより仕上げられている。

石 器 砥石が1点(S4)出土している(図版74)。自然石を利用したもので、約1/2が残存する。4面に使用痕が認められる。

時 期 出土遺物から南構Ⅳ期~V期と考えられる(第7章第1節)。94~97・113・117については、最終の埋没時期を示すものと考えられる。

SH13(図版5 写真図版32・63 附表31)

検出状況 第1次調査で検出した住居跡である。

南地区の中央部や南側で検出されている(第39図)。SH12の南東側、SH16の北西側に位置する。他の造構との明確な切り合い関係は認められないが、検出できたのは北西隅を中心とした一部に限られる。これは、当住居跡の床面が造構検出面である黒ボク層下面まで達していなかったことによるものと考えられる。ただし、住居跡を認識した段階においては、その埋土の抜がりを縦端面にお



第58図 SH13検出作業

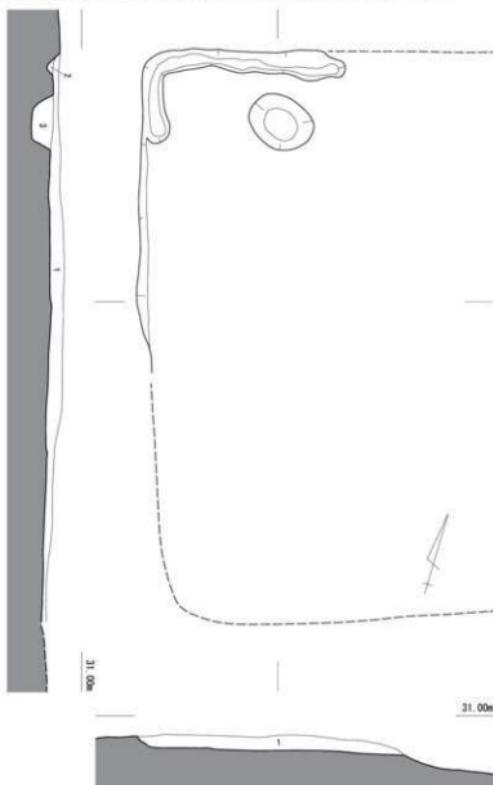
いて確認している(第58図)。これから復元される範囲が点線で復元されたラインである(第59図)。特に住居跡東側においては黒ボク層が厚く堆積しており、この箇所において住居跡埋土と黒ボク層の区別が困難で、その範囲を明確にすることはできなかつたためである。

形状、規模 住居跡の北西隅を中心に、西辺と北辺の一部が検出されている(第59図)。その規模は、西辺が90cm、北辺が2.30mである。両辺はほぼ直角関係にあることから、方形もしくは長方形の整った平面形をなしていたものと考えられる。そして、住居跡断面において確認できた住居跡埋土の抜がりから

復元できた住居跡の規模は、南北方向で7.00mである。さらに東西方向については最大4.40mを確認することができ、床面積は30.80m²である。西辺を基準とした棟軸方向はN17°Wを示している。床面はほぼ水平面をなし、検出面からの深さは15cm~20cmを測る。床面の標高は30.65m前後である。

埋 土 黒色極細砂1層が堆積していた。層相から判断して、人為的に埋められた層と考えられる。
屋内施設 主柱穴1穴と周壁溝の一部が検出されている。主柱穴は北西隅の1穴に限られる。本遺構は63cm×80cmと大型であることから土壤の可能性も考えられるが、検出された位置から主柱穴と判断している。床面からの深さは25cmを測る。埋土は黒褐色細砂混じり黑色極細砂1層である。

周壁溝は、北西隅を中心北辺と西辺に沿うように検出されている。床面における幅は23cmを測り、床面からの深さは8cmである。埋土は住居跡埋土と同じ黒色極細砂1層である。



1. 黒色極細砂 2. 黒色極細砂 3. 黑褐色細砂混じり黑色極細砂



第59図 SH13

出土遺物 土師器のみが出土し、須恵器は出土していない。器種としては、杯・高杯・甕・壺が出土している。高杯の120については、想定される住居跡のほぼ中央部の床面から出土している。杯底部のみ残存し、伏せられた状態で出土している(第60図)。

杯 119の1個体が出土している。杯Yに分類され、底部は平底をなしている。口縁部は全体的に肥厚傾向にある。体部外面はナデの後縦方向を主体としたヘラミガキ、内面は横方向のヘラナデにより仕上げられている。内外面とも雑な仕上げである。最後に口縁部外面を中心に横ナデにより仕上げられている。

高杯 120~122の3個体出土している。いずれもタイプを異にするものである。

120は高杯Abに分類されるタイプで、杯部を中心に残存する。外面は脚柱部から杯部にかけて縱方向のハケにより、内面は横方向のナデにより仕上げられ、最後に口縁部には仕上げナデが認められる。121は高杯Dcに分類され、外表面を横ナデ後内面に放射状の暗文が施されている。122は高杯Cdに分類され、口縁部が強い横ナデにより受口状をなしている。内外面とも横ナデにより仕上げられている。

甕 丸胴タイプの体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

壺 複合口縁をなす口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時 期 出土遺物から南構IV期と考えられる(第7章第1節)。

SH14(図版5 写真図版33・63・64 附表31・32)

検出状況 第1次調査と第9次調査で検出され、調査終了後に図上で合成された住居跡である。南地区の南東部で検出されている(第39図)。SH13の東側、SH15の北側に位置する。住居跡の東側については第9次調査区外まで拡がっており、全体を検出することはできなかった。ただし、西辺の規模から判断してその拡がりは大きくなく、ほぼ全体に近い範囲が検出されているものと考えられる。また、住居跡の南東隅は方形の土壙に切られている。

形状・規模 住居跡の平面形は、方形もしくは長方形をなすものと考えられる(第61図)。その規模は、南北方向で7.30mを測り、その直交方向で7.30m検出している。この値から本住居跡の規模は少なくとも53.29mはあったものと推定できる。南壁の直交方向を基準とした棟軸方向はN 3° Wを示している。床面は基本的に平坦で、その標高は29.95mである。また検出面からの深さは最大で40cmである。

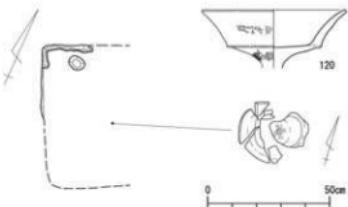
埋 土 黒色極細砂の1層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められた層と考えられる。
屋内施設 主柱穴を2穴(P1・P2)検出している。両柱穴を結ぶラインは、南辺に対してほぼ直交している。2穴とも平面形はやや歪んでいるが、円形傾向にある。各柱穴の径・床面からの深さは、P1が38cm・30cm、P2が28cm・10cmである。またP1-P2間の距離は3.60mである。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

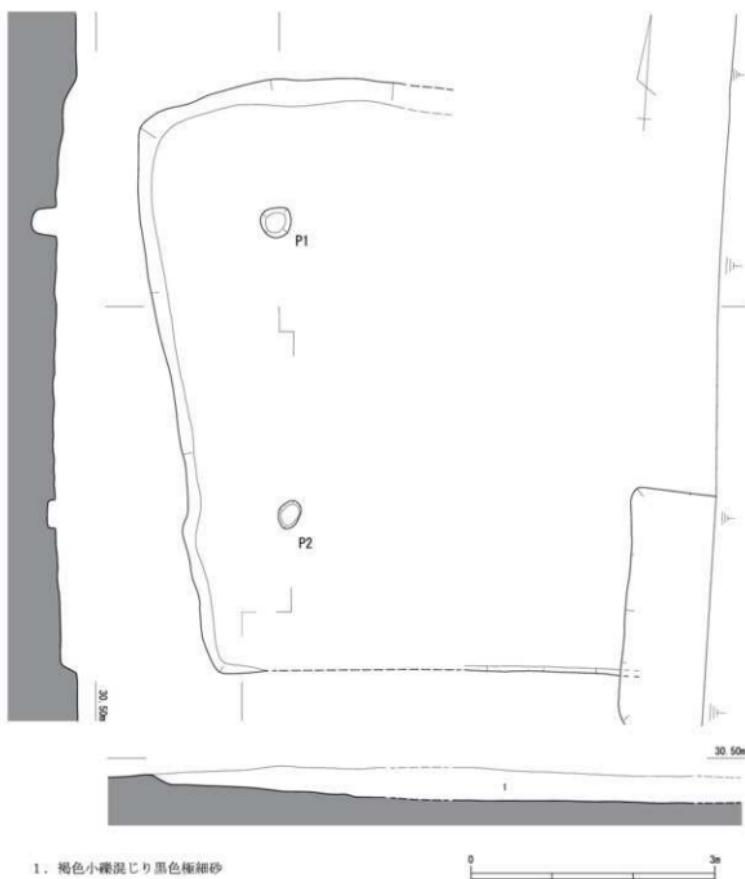
土師器 壺・甕・杯・高杯・壺が出土している。

壺 複合口縁壺の口縁部片と小型丸底壺の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

甕 甕Ea・甕Ec・甕Efの口縁部片が出土しているが、甕Eaと甕Ecについては小片のため図化できな



第60図 SH13 120出土位置・出土状況



第61図 SH14

かった。図化できたのは甕Efの123の1個体である。体部外面を縦方向のハケ、内面を横方向のヘラ削りの後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

杯 124の1個体が出土している。杯Ha2に分類され、口縁部内外面を回転ナデの後、外面は静止ヘラ削りにより仕上げられている。

高坏 高坏Cc・高坏Cd・高坏Ceと脚部が出土している。

高坏Ccは125の1個体である。坏部のみ残存する。外面を指オサエ後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられ、その後内面に放射状の暗文が施されている。全体的に器壁が厚く、粗い仕上げである。

高坏Cdは126の1個体である。126は底部付近を欠くため鉢の可能性も否定できない。内湾傾向にある体部に対して、口縁部が横ナデにより内湾気味に屈曲している。体部内面には縦方向の暗文が施されて

いる。また体部外面はナデにより仕上げられている。

高坏Ceの127は脚部との接合部から口縁部にかけて残存する。内面については横方向のヘラミガキの後、縦方向の暗文が施されている。坏部外面は縦方向のハケの後ナデにより仕上げられている。

脚部は128と129の2個体である。ともに脚柱部に対して「ハ」字形に屈曲している。ナデを基調としているが、裾部内面はヘラナデにより仕上げられている。

甌 130の1個体が出土している。底の縁部の一部である。外面はハケを基調とし、底より下部はナデが加えられている。内面は指オサエと指ナデにより仕上げられ、底より上部はヘラ削りにより仕上げられている。

須恵器 瓢蓋・杯・甌が出土している。

瓢蓋 131の1個体である。口縁端部は明確に内傾する端面をなしている。天井部の2/3が回転ヘラ削りにより仕上げられている。

杯 132の1個体である。口縁部を中心にわずかに残存する小片で、杯A2に分類される。口縁端部に内傾する端面が認められる。わずかに残存する底部は回転ヘラ削り後静止ヘラ削りが加えられている。

甌 133の1個体で、外面とも回転ナデにより仕上げられ、外面にはカキ目が加えられている。

時 期 出土須恵器から南轍V期と考えられる。土師器については、当住居跡の埋没時期を示すものと考えられる(第7章第1節)。

SH15(図版6 写真図版33・64 附表32)

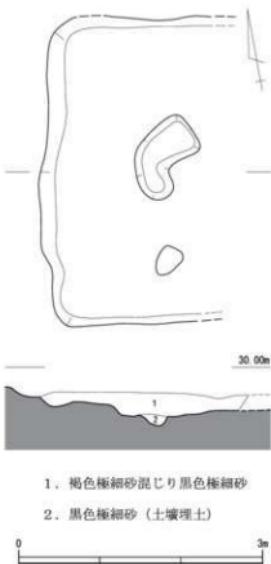
検出状況 第1次調査で検出した住居跡である。南地区の南東部で検出されている(第39図)。SH14の南側、SH18の北東側に位置する。住居跡の東側については第9次調査では検出することはできなかった。この結果、検出できたのは全体の約1/2に限られる。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

形状・規模 住居跡の北西隅を中心に、西辺と北辺・南辺の一部が検出されている(第62図)。北辺と南辺が平行関係にあり、両辺と西辺がほぼ直角関係にあることから、ほぼ整った方形をなしていたものと考えられる。北辺と南辺から復元される南北方向の規模は3.73mである。東西方向については最大で2.50m検出されている。西辺を基準とした棟軸方向はN 9° Wを示している。床面はやや凹凸が認められ、検出面からの深さは15cm~30cmを測る。また、床面の標高は29.48mから29.60mである。

埋 土 黒色極細砂1層が堆積していた(第62図)。層相から判断して、人為的に埋められた層と考えられる。

屋内施設 主柱穴1穴と土壤が検出されている。主柱穴は南西隅の1穴に限られる。平面形は、38cm×27cmと不整形である。

土壤については住居跡の中央部付近で検出されたことから、本住居跡に伴うものと判断している。平面形はL字形と不整形である。断面形は皿形もしくは緩やかなU字形をなし、最深部



第62図 SH15

における床面からの深さは13cmである。埋土は黒色極細砂1層が堆積し、遺物の出土は認められない。

出土遺物 土師器の壺・甕・竈・高坏が出土しているが、甕については小片のため図化できなかった。

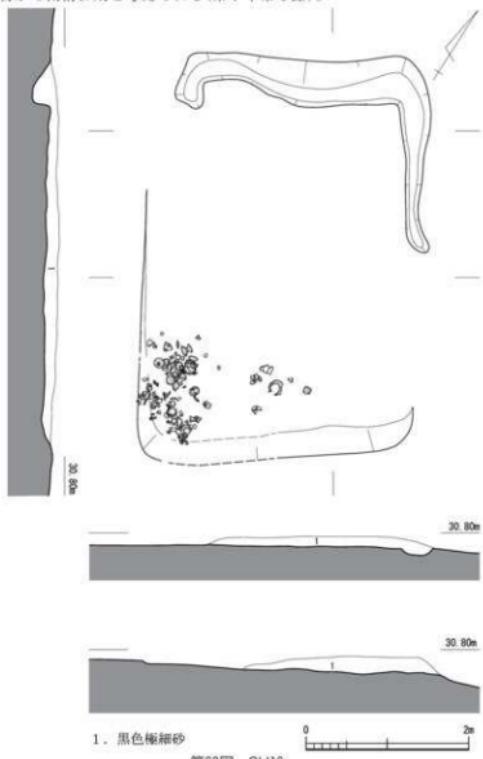
壺 134～136の3個体出土しているが、いずれも特徴を異にしている。

134は壺Bbに分類される。直立傾向にある頸部に対して口縁部がわずかに外反する。体部外面は縱方向のハケ、内面は縱方向のハケの後へラ削りにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。体部内面のへラ削りは横向方に丁寧に施されている。また135は甕Bcに分類され、134と同様に仕上げられている。136は壺Dに分類される。体部外面はナデ、内面はへラナデにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。体部外面には一部粗いハケも認められる。ただし、体部を中心で器壁は厚く仕上げられている。

甕 137の1個体で、底部がわずかに残存する。外面は縱方向を主体としたハケ、内面は横方向を主体としたへラ削りにより仕上げられている。底部は平坦面をなし、板目状の圧痕が認められる。

高坏 高坏Bbに分類される138の1個体が出土している。内外面ともハケを基調とし、最後に口縁端部内外面が横ナデにより仕上げられている。また、坏底部内面には暗文状のへラミガキ痕が認められる。

時期 出土遺物から南構IV期と考えられる(第7章第1節)。



1. 黒色極細砂
第63図 SH16

SH16(図版6~8 写真図版33・34・64~72 附表32~34)

検出状況 第1次調査で検出した住居跡である。南地区の中央部で検出されている(第39図)。SH13の南東側、SH14の南西側、SH17の北東側に位置する。ほぼ全体が検出されているが、南西壁と北東壁の一部を検出することはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

形状・規模 住居跡の平面形は長方形をなす(第63図)。その規模は、北西-南東方向で4.90m、その直交方向で3.50mである。この値から復元される住居跡の面積は17.15m²と、今回報告する住居跡のなかでは小型である。南西壁を基準とした袖軸方向はN32°Wを示している。床面は基本的に平坦で、その標高は30.60mである。また検出面からの深さは最大で22cmを測る。

埋 土 黒色極細砂の1層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められた層と考えられる。

屋内施設 北西隅から北東壁に沿うように周壁溝が検出されている。その床面における幅は北西壁側で56cm、北東壁側で17cmと、一定していない。断面形は逆台形からU字形をなし、床面からの深さは最大で20cmを測る。

出土遺物 土師器と須恵器が多量に出土している(図版6~8)。特に、住居跡中央部(土器群1)、中央部南側(土器群2)、南西隅(土器群3)の3箇所を中心に、まとまって出土している(第64図)。土器群1と土器群2は床面上から出土している。

土器群1からは167・170・206の3個体が出土している。土器群2からは146・154・174の3個体が出土している。さらに土器群2の南側からも、142・158・161・165がまとまって出土している。土器群3からは、148・169・178・180・185・187・189~203・205~209・212~218・221~224が出土している。この他土器群3の周辺からは、140・155・160・162・175~177・220が出土している。特に土器群3については、住居跡が機能していた際の状況を示すものではなく、住居跡の埋没過程において一括で廃棄されたものと考えられる。

土師器 壺・甕・鉢・杯・高环・瓶・把手が出土している。

壺 壺Bb・壺Cb・壺Cd・壺Dが出土している。

壺Bbは139の1個体で、広口壺の肩部から口縁部にかけて残存する。口縁部は外反気味に立ち上がり、外端部をつまむような横ナデにより内傾する端面をなしている。外面は体部から口縁部にかけて縱方向のハケ、内面は体部がヘラ削り、口縁部が横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。特に頭部内面は強い横ナデにより仕上げられ、内湾傾向にある。

壺Cdは140の1個体である。外面は、体部を縱方向を主体としたハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が横方向のヘラ削り、頭部がナデ、口縁部が横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。口縁部内面のハケは、体部外面とは異なり粗いハケである。

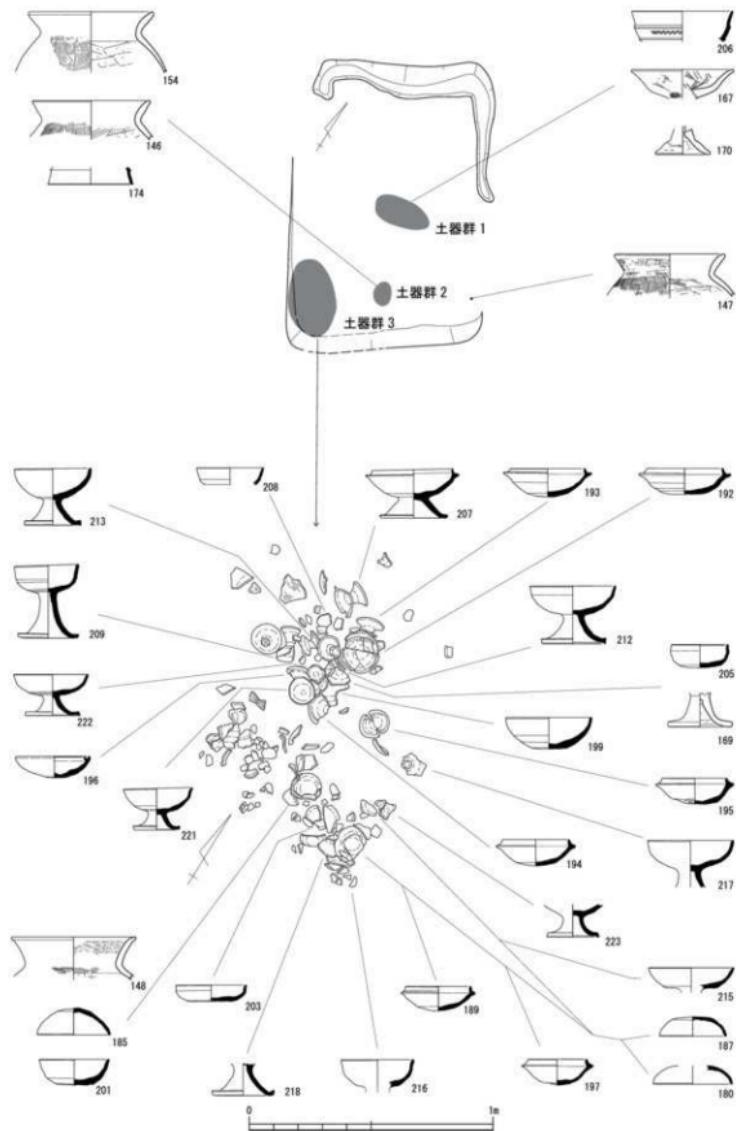
壺Dは141の1個体である。外面は、体部がナデ、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が強い指ナデ、頭部が横方向のナデ、口縁部が横方向のハケにより仕上げられている。体部内面の指ナデは粗い調整で、ナデによる窪みが顕著である。また、器壁が全体的に厚く仕上げられている。

壺Cbは142の1個体である。内外面とも横ナデにより仕上げられている。

甕 甕Ac・甕Ad・甕Bb・甕Cc・甕Ce・甕Eb・甕Ec・甕Ed・甕Ee・甕Fa・甕Fdが出土している。

甕Acは157の1個体である。157は口縁部にはば直交する端面をなしている。体部外面がタテ方向のハケ、内面が横方向のヘラ削り後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

甕Adは144の1個体である。体部外面は口縁部にかけてハケ、内面はハケの後横方向を主体としたヘ



第64図 SH16土器出土位置・出土状況

ラ削り、最後に口縁部外面が横ナデにより仕上げられている。

壺Bbは160の1個体である。体部内面が横方向のヘラ削りによる以外、内外面とも横ナデにより仕上げられている。山陰系として報告するが、胎土の特徴は明らかに在地的である。

壺Ccは159の1個体である。159は、口縁端部を口縁部に対して直交する横ナデにより断面方形をなす。体部は、外面が横方向のハケ、内面が横方向のヘラ削りにより仕上げられ、その後口縁部外面が横ナデにより仕上げられている。また頭部内面はナデにより仕上げられている。

壺Ceは158の1個体である。158は口縁端部が外方向へつまみ出され受け口状をなしている。体部から頭部外面を縱方向の、同内面を横方向のハケの後、口頭部外面が横ナデにより仕上げられている。

壺Ebは151と152の2個体である。151の体部内面については、中位以下が横方向のナデにより仕上げられている。2個体とも、体部外面は口縁部にかけてハケ、内面はハケの後横方向を主体としたヘラ削り、最後に口縁部外面が横ナデにより仕上げられている。

壺Ecは148と149の2個体である。2個体とも、体部外面は口縁部にかけてハケ、内面はハケの後横方向を主体としたヘラ削り、最後に口縁部外面が横ナデにより仕上げられている。

壺Edは145～147・154～156の6個体である。基本的な整形方法は壺Ecと同じである。154と155は、体部外面をハケ、内面をヘラ削り後、口縁部外面が横ナデにより仕上げられている。ただし体部外面のハケについては、154が縱方向であるのに対して、155は横方向が主体で一部縱方向が認められる。また内面についても、155はヘラ削りの後横方向のハケが加えられている。この他156の口縁部内面には斜方向のハケ目が認められる。

壺Eeは150の1個体である。基本的な整形方法は壺Ecと同じである。

壺Faは143の1個体である。143は比較的大型の壺で、長胴傾向にあるものと考えられる。外面は、体部から口縁部にかけて縱方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が横方向のヘラ削り、口縁部が下半を斜方向、上半を横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。特に内面のヘラ削りについては丁寧に施されている。

壺Fdは153の1個体である。外面は、体部が横方向のヘラ削り後縱横両方向のハケ、その後口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が縱方向のヘラ削り後、頭部がナデ、口縁部が横ナデにより仕上げられている。全体的に稚拙なつくりで、体部内面にヘラ先の当たりが多く認められるとともに、器壁が厚い傾向にある。

鉢 鉢Bf・他が出土している。

鉢Bfは162の1個体である。半球形の体部に水平方向に口縁部が屈曲している。体部内面が横方向のヘラ削り、外面が縱方向の後、横・斜方向のハケにより仕上げられ、最後に口縁部外面が横ナデにより仕上げられている。

この他163は残存高3.45cmと小型の鉢である。底部は明確な平底をなし、体部は手づくねにより成形され、内面はナデにより仕上げられている。

杯 杯Cと杯Gが出土している。

杯Cはfタイプの161の1個体である。体部から口縁部にかけて内湾し、口縁部外端部が強い横ナデにより上方へつまみあげられている。外面は、体部を指オサエの後ナデにより仕上げられ、その後底部がヘラ削り、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、底部から口縁部にかけてナデの後、縱方向の暗文が施されている。

杯Gは164の1個体が出土している。平底をなす底部を中心に残存する。底部外面が静止ヘラ削りによる以外、内外面ともナデにより仕上げられている。

高杯 高杯Ad・高杯Ac・高杯Bc・脚部が出土している。

高杯Adは165の1個体である。165は坏部上半のみの残存で、口縁部が水平方向に折り曲げられている。坏部は内外面ともナデにより仕上げられ、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。最後に内外面に暗文が加えられている。暗文は内外面とも上方向→下方向に連続して繰り返されている。

高杯Acは166の1個体である。166も坏部上半が残存している。体部から口縁部にかけて直線的で、内外面とも横ナデにより仕上げられている。その後内面に放射状の暗文が施されている。

高杯Bcは167の1個体である。167は、外面が縱方向のハケにより、内面が縱方向のハケの後口縁部を横ナデにより仕上げられている。また、内面には斜方向の暗文が2段にわたり施されている。下段が縱方向、上段が斜方向であるが、その間隔・方向は一定していない。

脚部は168～170の3点が出土している。

168が接合部を中心に残存し、脚柱部内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。また、坏底部もヘラミガキにより仕上げられている。169は、外面が縱方向のヘラナデ、内面が横方向のヘラ削りにより仕上げられている。また、脚端部は内外面とも横ナデにより仕上げられている。170は全体的に「ハ」字形に開く傾向にあり、外面はナデ、内面は横方向のヘラナデにより仕上げられている。

瓶 171の1点が出土している。いわゆる山陰型瓶に分類されるもので、口縁部を中心に残存している。口縁部と体部の境に断面方形の突帶が貼り付けられている。外面は横ナデ、内面は体部が指オサエの後ナデ、口縁部が横ナデにより仕上げられている。後述する172と同一個体の可能性が考えられる。

把手 172と173の2点出土している。172は環状をなす把手である。全体的に指ナデを基調として仕上げられている。173は平面が舌状をなすもので、縱方向のハケを基調として仕上げられている。2点とも把手と体部との接合方法については、十分観察できなかった。

須恵器 杯蓋・杯・高杯が出土している。

杯蓋 杯蓋a・杯蓋Y4・杯蓋Y6・他が出土している。

杯蓋aは174の1個体が出土している。口縁端部はわずかに内傾する端面を有する。

杯蓋Y4は183～185の3個体である。183は天井部を回転ヘラ切り後天井部全体がナデにより仕上げられている。板目状の圧痕が顕著に認められる(写真図版67)。184はヘラ削りが認められず、回転ヘラ切りにより切り離されている。185の天井部については釉が厚く付着しているため観察できないが、ヘラ切りの可能性が高い状況である。

杯蓋Y6は187と188の2個体である。天井部は回転ヘラ切りにより切り離されている。

他は177～182・186の7個体である。内外面とも回転ナデを基調とし、天井部は回転ヘラ切後未調整である。このほか177の天井部にはヘラ切り後ヘラ記号が施されている。186もヘラ切りによっている。

杯 杯a2・杯d・杯h3・杯i3・杯i5・杯j9・杯j12・杯o・杯ℓ・杯m・杯n・杯tが出土している。

杯a2は175と176の2個体である。いずれも、口縁部は内傾する端面を有する。底部の2/3は回転ヘラ削りが施されている。

杯dは195の1個体である。195底部は静止ヘラ削りにより仕上げられている。195は全体的に椎揃なつくりで、器壁が明らかに厚く、粗い胎土である。他の杯と特徴を異にしている。

杯h3は191～193の3個体である。191については、底部と体部間外面に補助ケズりが認められる。192

は、底部と体部外面に回転ナデが、体部と口縁部間に弱い補助ケズリが認められる。193は、体部外面に回転ヘラナデが認められる。底部の回転ヘラ削りは中央部までは及ばず、退化削りとなっている。

杯i3は190の1個体である。190の底部はヘラ切り後ナデが施されている。

杯i5は189と194の2個体である。2個体とも底部はヘラ切り後ナデが施されている。

杯j9は197の1個体である。底部はヘラ切り後未調整である。

杯j12は196の1個体である。196に関しては蓋となる可能性も否定できないが、内面に軸の付着が認められることと、つまみが認められないことから、杯として報告する。底部はヘラ切り後未調整である。

杯oは198の1個体である。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、口縁部はわずかに外反している。

杯ℓは199と200の2個体である。199は平底形態をなし、体部から口縁部にかけて大きく内湾している。外面は、底部が回転ヘラ切り後ナデ、体部が回転ヘラ削り後ナデ、口縁部が回転ナデにより仕上げられている。内面の調整については軸の付着が著しく詳細を観察できないが、回転ナデの可能性が高い。200は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

杯mは201と204の2個体である。201は口径に対して器高が高い傾向にある。底部はヘラ切り後粗いナデが施され、平底形態をなす。体部と底部の境には補助ケズリが施されている。

204は、体部に対して口縁部が直立気味に立ち上がる。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

杯nは203と205の2個体である。203は口径に対して器高が低い個体である。底部は明確な平底形態をなし、ヘラ切りの後ヘラナデが加えられている。205は口径9.10cmと小型の土器である。内湾傾向にある体部に対して口縁部が外反傾向にある。底部外面は回転ヘラ切り後ナデが加えられている。

杯tは202の1個体である。202は底部から体部にかけて内湾傾向にある。底部外面は回転ヘラ削り後ナデ、体部から口縁部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

高杯 無蓋高杯と脚部が出土している。無蓋高杯は、無蓋高杯A・無蓋高杯Ca・無蓋高杯E・無蓋高杯Ha・無蓋高杯Hb・無蓋高杯Hc・無蓋高杯Hd・無蓋高杯Heが出土している。

無蓋高杯Aは206の1個体である。中位に2条の断面三角形の突帯が認められ、突帯間に3条からなる波状文が施文されている。

無蓋高杯Caは207の1個体である。杯Hに短脚が付くタイプである。内外面とも回転ナデを基調として仕上げられているが、杯底部外面の一部に回転ヘラ削りが施され、ナデにより仕上げられている。

無蓋高杯Eは208と209の2個体である。209は良好な残存状況である。杯底部外面が回転ヘラ削り後ナデによる以外、回転ナデにより仕上げられている。ただし、杯部内面に関しては軸の付着が著しく、調整を観察することはできない。なお脚部に透かしは認められない。

無蓋高杯Haは211と213の2個体である。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。無蓋高杯Hbは212・216・220の3個体である。216のみ杯部が浅い器形となっている。無蓋高杯Hcは221の1個体である。杯部外面下半には回転ヘラ削りが施され、ナデにより仕上げられている。無蓋高杯Hdは210・214・215・217の4個体である。217のみ全体的に丸味を帯びている。無蓋高杯Heは222の1個体である。

脚部は脚Ca(218)・脚Da(219)・脚Dc(224)・脚Dd(223)が出土している。いずれも内外面が回転ナデにより仕上げられている。

時一期 出土遺物から南構IV期に機能し同VI期に土器が廃棄されたものと考えられる(第7章第1節)。

SH17(図版9 写真図版35・72・73 附表35)

検出状況 第1次調査で検出した住居跡である。

南地区の南部中央で検出されている(第39図)。

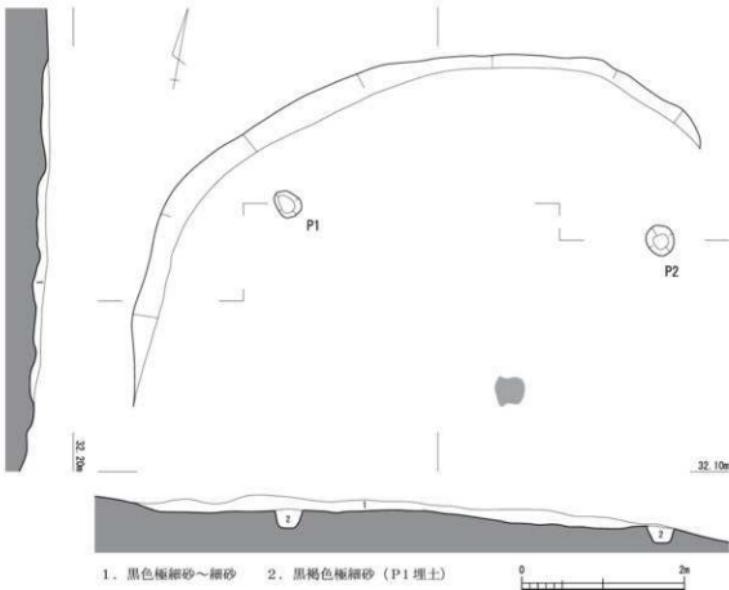
SH16の南西側、SH18の北西側に位置する。検出した範囲は北辺から西辺の一部に限られ、東辺から南辺にかけては検出されていない。このため、検出できた範囲は全体の約1/3に限られる。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

形状・規模 住居跡の平面形は、検出後において

は北辺から西辺にかけての形状から、円形もしくは隅丸方形をなしていたものと考えられる(第66図)。

これに当住居跡確認段階の状況(写真図版35)を考慮に入れると、隅丸方形の可能性が高い。ただし上記の検出状況から、住居跡の規模を明確にすることは困難である。

東側・南側については住居跡の周壁は残存していなかったが、住居跡埋土の括がりを確認することができた。その範囲は、東西方向で6.50m、南北方向で4.30mである。P1-P2間の直角方向を基準とした輪軸方向はN 4° 30' Wを示している。床面は基本的に平坦であるが、北西側から南東側への傾斜が認められる。その標高は北西部で30.84m、南東部で30.50mである。検出面からの深さは最大で20cmを測る。



第65図 SH17検出作業



埋 土 黒色極細砂～細砂の1層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められた層と考えられる。

屋内施設 主柱穴が2穴(P1・P2)検出されている。2穴とも住居跡の北半部に位置する。この状況から、当初は4穴であったものと考えられる。P1は平面形がやや歪んだ楕円形をなし、その規模は36cm×28cmを測り、床面からの深さは23cmである。P2は平面形が楕円形をなし、その規模は39cm×34cmを測り、床面からの深さは19cmである。またP1-P2間の距離は4.60mである。この他、本住居跡が検出された範囲の南端中央部で、焼土の掘りがきを確認している(第66図 網掛け)。その位置は、復元される住居の範囲のなかではほぼ中央部にあたる。

出土遺物 土器師の壺・鉢・甕・高杯・瓶が出土している。特に、住居跡北西隅付近床面上から比較的まとまって出土している(第67図)。なかでも226は、口縁部を床面に付け、その場で押し潰された状態で出土している(第67図)。

壺 225と226の2個体出土している。225は広口壺の口縁部と考えられる。ともに、内外面とも横ナデにより仕上げられている。226は直立する頭部に対して口縁部が大きく水平方向に外反している。外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。また口縁部外面は、ヘラミガキの前に横ナデが施されている。

鉢 小型丸底鉢と台付鉢が出土している。

小型丸底鉢は227の1個体が出土している。球形に近い体部をなし、口縁部が「く」字形に外反している。外面は、底部から体部にかけてヘラナデにより仕上げられている。一部縦方向のヘラミガキが認められる。全体的に丁寧な仕上げとはなっていない。内面は、底部付近がナデ、体部中位が横方向のヘラ削り、体部上半が強い横ナデにより仕上げられている。最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

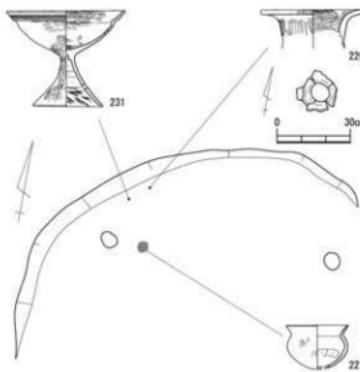
台付鉢は228の1個体で、脚部から体部にかけて残存する。外面は、底部が指ナデ、体部がナデ、その後脚部が貼り付けられ、指オサエにより仕上げられている。内面は、縦方向(下→上)のヘラナデにより仕上げられている。

甕 甕Baと甕Edが出土している。

甕Edは229の1個体である。内外面とも横ナデにより仕上げられている。

甕Baは230の1個体である。体部外面はナデ、内面はヘラ削りにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

高杯 231と232の2個体が出土している。231は有段口縁高杯である。杯部の一部が非接合のため図上で復元している。外面は、脚部から杯底部にかけて縦方向の、杯部が横方向のヘラミガキにより仕上げられている。その後、口縁部は横ナデ後擬凹線が加えられている。内面は、杯部が横方向に5分割するように横方向のヘラミガキにより仕上げられている。脚部は、上半が横方向の弱いヘラ削り、下半が



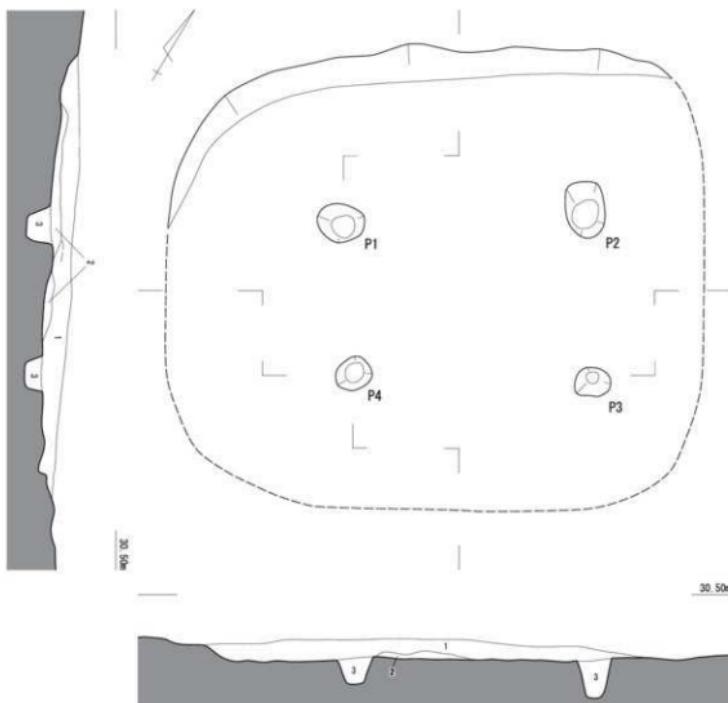
第67図 SH17土器出土位置

斜方向のハケにより仕上げられている。脚部には径 1 cm の円形の透かしが 3 方に開けられている。

232は脚部のみ残存する。外面は、脚柱部が縱方向の、脚裾部が横方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面は、脚柱部が横方向のヘラ削り、脚裾部が横方向のハケにより仕上げられている。最後に脚端部が横ナデにより仕上げられている。

概 233の 1 個体で把手のみ残存する。環状をなす把手で、いわゆる山陰型瓶の一部の可能性が考えられる。把手は、体部内に挿入させる形で取り付けられている。把手はナデにより、体部外面はハケにより、体部内面はヘラ削りにより仕上げられている。

時 一期 出土遺物から南構Ⅲ期(庄内併行期)と考えられる(第7章第1節)。



1. 暗褐色小礫混じり黑色極細砂～細砂 2. 暗褐色極細砂 3. 黒褐色極細砂～細砂(柱穴埋土)



第68図 SHI18

SH18(図版9 写真図版35 附表35)

検出状況 第1次調査で検出した住居跡である。

南地区の南東部で検出されている(第39図)。SH15の南西側、SH17の南東側、SH20の北側に位置する。住居跡としてのプランを検出できたのは北側に限られるが、埋土の抜がりとしてはほぼ全体が確認されている。この範囲においては、他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

形状・規模 住居跡の平面形は、プランを検出できた北辺と、土層断面で確認した住居跡埋土の抜がりから復元すると、方形であったものと考えられる(第68図 点線)。この範囲は、後述する主柱穴がほぼ中央部に位置付けられることから、無理のない復元と考えられる。

これにより復元された規模は、南北方向で約5.60m、東西方向で約6.60mで、床面積は36.96m²である。主柱穴(P2-P3)を基準とした軸線方向はN31°15'Wを示している。床面はやや凹凸が認められ、検出面からの深さは最深部で30cmを測る。また床面の標高は29.65mから29.70mである。

埋土 上から、暗褐色小礫混じり黒色極細砂～細砂と暗褐色極細砂の2層からなる。2層とも、その層相から判断して人為的に埋められた層と考えられる。

屋内施設 主柱穴4穴(P1～P4)が検出されている。これら4穴の配置については、ほぼ整った方形をなしている。各柱穴の平面はいずれも梢円形もしくは隅丸長方形傾向である。埋土はいずれも黒褐色極細砂～細砂である。柱痕については平面・断面ともに確認することはできなかった。

各柱穴の平面規模・床面からの深さは、P1が58cm×48cm・30cm、P2が47cm×70cm・60cm、P3が45cm×35cm・45cm、P4が45cm×38cm・33cmである。また柱穴間の規模は、P1-P2間が3.00m、P2-P3が2.00m、P3-P4間が2.95m、P4-P1間が1.80mである。

なおP1とP2の北辺からの距離は、いずれも2.00mである。

出土遺物 土器類の壺・高坏・器台・壺・鉢が出土している。このなかで、壺と鉢については小片のため図化できなかった。

壺 壺Abと壺Bbが出土している。

壺Abは234の1個体である。口縁外端部が横方向につまみ出されている。体部外面は縱方向のハケ、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

壺Bbは235の1個体である。内外面とも横ナデにより仕上げられている。体部内面はナデにより仕上げられている。

高坏 高坏Cc・高坏Dd・脚部等が出土している。

高坏Ccは236と237の2個体である。2個体とも横ナデを基調とし、外面底部付近は236がナデ、237がヘラナデにより仕上げられている。237の内面は横方向のヘラミガキにより仕上げられ、縦方向の暗文が施されている。

高坏Ddは239の1個体である。239は坏部外面に段が認められるタイプである。段より上側は画面とも横ナデにより仕上げられている。また坏底部内面はハケの後ナデにより仕上げられている。



第69図 SH18検出作業

脚部は238の1個体である。外面は横ナデの後同方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラ削りとハケにより仕上げられている。特に外面のヘラミガキの単位は細筋である。

この他接合部を中心とした240が出土している。240は高環Cの一部と考えられ、指オサエとナデにより仕上げられている。

器台 241の1点が出土している。いわゆる山陰系の鼓形器台である。内面はヘラ削り、外面は横ナデにより仕上げられている。わずかに残存する受け部内面はナデにより仕上げられている。

壺 複合口縁をなす口縁部片と、小型丸底壺が出土している。後者は、口縁部から体部にかけての小片と、底部片が出土している。

鉢 底部片が出土している。底部は平底をなし、碗の可能性も考えられる。

時期 出土遺物から南構Ⅳ期と考えられる(第7章第1節)。

SH19(図版9・69 写真図版36・73 附表35・98・102)

検出状況 第3次調査で明らかとなった住居跡で

ある。調査地南端部中央部で検出した(第39図)。

SH20の南西側、SH21の北西側に位置する。検出された地区は、遺跡南側を流れる稻葉川に向かって傾斜しており、本住居跡を含めた3棟の竪穴建物(SH19～SH21)がこの傾斜地で検出されている(第70図)。他の遺構との切り合い関係は認められない。このため住居跡全体が検出されているが、傾斜地にあるため、南西部を中心に周壁を検出することはできなかった。

形状・規模 平面形は長方形をなし(第71図)、東辺を基準とした棟軸方向はN13°Wを示している。住



第70図 調査地南端部の調査



第71図 SH19

居跡の規模は、北辺で6.40m、東辺で3.30mを測り、両者を基準とした平面積は21.12m²である。床面はほぼ水平な面をなし、北側検出面からの深さは23cmである。床面の標高は29.00m～29.20mである。

埋 土 小礫混じり黒色シルト混じり極細砂1層が堆積していた。層相から判断して、人為的に埋められた層と判断される。

屋内施設 主柱穴・壁溝などは検出されていない。南辺中央部付近で焼土が検出されている(第72図)。その規模は54cm×42cmである。

出土遺物 土器・土製品・金属製品が出土している。

土 器 土師器と須恵器が出土している(図版9)。

土師器 壺・壺・高杯が出土しているが、壺と高杯に関しては小片のため図化できなかった。高杯は椀形に分類されるものである。

壺 壺Bb・壺Eb・壺Caが出土している。

壺Bbは243の1個体である。243は外面とも横ナデを基調とし、体部内面がヘラ削りにより仕上げられている。

壺Ebは242の1個体である。242は、外面が体部から口縁部にかけて縦方向のハケの後、内面が体部をヘラ削り、口縁部を横方向のハケを施し、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

壺Caは244と245の2個体である。244と245は外面とも横ナデにより仕上げられている。体部内面については、244がヘラナデ、245が横方向のヘラ削りにより仕上げられている。さらに245の体部外表面は縦方向のハケにより仕上げられている。

須恵器 杯蓋・高杯・壺が出土している。高杯と壺については小片のため図化できなかった。高杯は脚端部が、壺は体部片が出土している。



第72図 SH19 焼土検出状況



第73図 M1

杯蓋は246の1点を図化している。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、天井部に対して口縁部が屈曲傾向にある。

土製品 土錐が1点(247)出土している。完存する個体で、ナデにより仕上げられている。

金属製品 鍔が1点(M1)出土している(第73図)。刃部を中心に残存し、残存長は5.20cmである。刃部の幅は1.00cmを測り、横断面は片丸造となっている。また、わずかに反り気味となっている。中央部には鎬が認められ、中央部の厚さは3mmである。茎の断面は9mm×3.50mmの長方形をなしている。

時 期 出土遺物から南構IV期に位置付けられる(第7章第1節)。

SH20(図版9・74 写真図版36・37・185 附表35・100)

検出状況 第3次調査で明らかとなった住居跡である。調査地南東部で検出されている(第39図)。

検出された地区は跡跡南側を流れる稻葉川に向かって傾斜しており、本住居跡もこの傾斜地で検出されている。SH19の東側・SH21の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、住居跡全体が検出されている。ただし傾斜地で検出されたため、南側の周壁の立ち上がりはわずかである。

形状・規模 平面形は長方形をなす(第75図)。北辺・西辺・南辺が直線的であるのに対して、東辺のみやや歪んでいる。西辺を基準とした棟軸方向はN12°Wを示している。規模は、北辺で3.40m、西辺で4.15mを測り、両者を基準とした平面積は14.11m²である。床面はほぼ水平面をなし、北側検出面からの深さは20cmである。また床面の標高は29.30~29.40mである。

埋 土 黒色シルト混じり極細砂1層が堆積していた。

屋内施設 主柱穴・周壁溝などは検出されていない。南辺中央部付近で焼土が検出されている。その規模は63cm×48cmである。

出土遺物 土器と石器が出土している。

土 器 土師器と須恵器が出土している(図版9・附表35)。

土師器 壺と杯が出土している。

壺 壺Cgと壺Dbが出土している。

壺Cgは249の1個体である。249は口縁部外面に段が認められ、複合口縁状をなす。内外面とも横ナデにより仕上げられている。体部内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

壺Dbは248の1個体である。248は口縁部が直立気味に外反し、端部が斜下方につまみ出されている。形態的に壺の可能性も考えられる。体部外面を斜方向のハケ、内面を横方向のヘラ削り後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

杯 杯Caに分類される250の1個体が出土している。半球形の体部に対して口縁部が短く屈曲している。内外面とも横ナデにより仕上げられ、最後に内面に暗文が施されている。

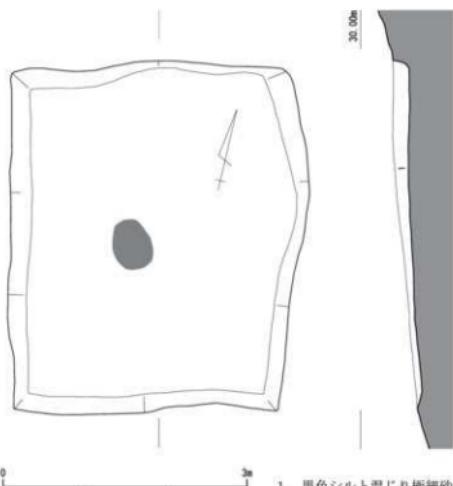
須恵器 杯1個体(251)が出土している。杯C8に分類される。口径12.20cmと大型で、口縁部の立ち上がりも顕著である。

石 器 砥石(S5)と磨石(S6)が出土している(附表100)。砥石は断面方形をなす自然石を利用したものであるが、一端を欠く。2面に使用痕が認められる。磨石は扁平な球形をなす自然石を利用した製品である。径7cm大と小型で、側面に使用痕(擦痕)が認められる。

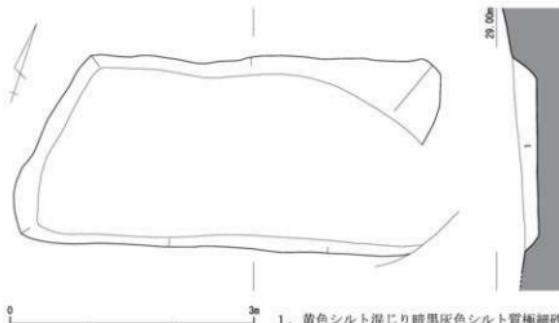
時 期 出土遺物から南構VI-1期を中心とした時期に位置付けられる(第7章第1節)。



第74図 SH20の検出作業



第75図 SH20



第76図 SH21

SH21(図版10 写真図版36・37・73 附表35・36)

検出状況 第3次調査で明らかとなった住居跡である。調査地南東隅で検出されている(第39図)。検出された地区は遺跡南側を流れる稻葉川に向かって傾斜しており、SH19・SH20同様、本住居跡もこの傾斜地で検出されている。SH19の南東側、SH20の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、南東隅がわずかに調査区外へ拡がっている。当住居跡が検出された地区は東側への傾斜も認められるため、東辺については残存していなかった。さらに傾斜地で検出されたため、南側の周壁の立ち上がりはわずかである。

形状・規模 北辺と南辺が平行関係にあるのに対して、西辺はこの両辺に対して斜行している。このため、平面形は平行四辺形傾向にある(第76図)。南辺の直角方向を基準とした棟軸方向はN18°Wを示している。その規模は、北辺で4.20m、北辺-南辺間で2.38mを測り、両者を基準とした床面積は9.99m²である。床面はほぼ平坦面をなし、北側検出面からの深さは28cmを測り、その標高は29.47m~29.50mである。

埋 土 黄色シルト混じり暗黒灰色シルト質極細砂1層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

屋内施設 主柱穴・周壁溝などは検出されていない。

出土遺物 土器と土製品が出土している。

土 器 土師器と須恵器が出土している(図版10)。このなかで、土師器の255は住居跡北東隅付近から出土している(第77図・第78図)。

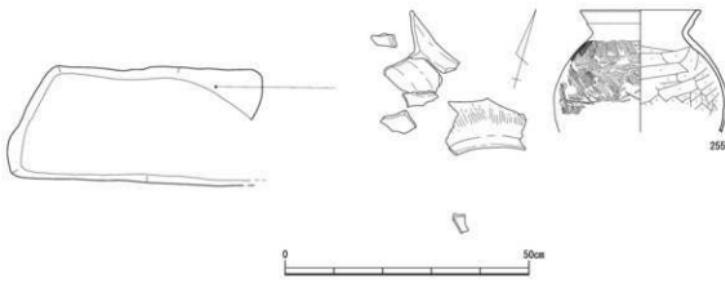
土師器 杯・壺・壺・高杯が出土している。高杯については口縁部片と脚部片が出土しているが、小片のため復元できなかった。

杯 杯Cb・杯Cd・杯Gが出土している。

杯Cbは252の1個体である。252は半球形の体部に口縁部が短く内湾気味に屈曲している。内外面



第77図 SH21 255出土状況



第78図 SH21土器出土位置・出土状況

とも横ナデにより仕上げられている。

杯Cdは253の1個体である。253は半球形の体部に対して口縁部が直立気味に屈曲している。体部外面をナデの後、体部内面および口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。その後内面に縱方向の暗文が施されている。

なお252と253は底部まで残存しないため、高杯の可能性も否定できない。

杯Gは254が出土している。254は底部から体部にかけて残存し、底部が平底をなしている。底部は、外面が横方向のハケにより、内面がヘラ削りにより仕上げられている。体部は、外面が縱方向のハケの後ナデ、内面がナデにより仕上げられている。

甕 Cgと甕Eeが出土している。

甕Cgは255の1個体である。255は、球形の体部に対して口縁部が「く」字形に屈曲している。口縁部外面に段が認められ、複合口縁の痕跡と考えられる。体部外面は、横方向のハケの後縦方向と横方向の粗いヘラナデ、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。体部内面のヘラ削りは、下半部が縦方向に施されている。本個体については形態的に壺の可能性も考えられるが、外面全面に煤の付着が認められることから甕として報告する。

甕Eeは256の1個体である。256は口縁部を中心に残存し、体部に対して大きく外反傾向にある。体部から口縁部にかけての外面を縦方向のハケ、体部内面を横方向のヘラ削り後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。体部外面にはハケの後粗いヘラナデが加えられている。

壺 小型丸壺の257の1個体が出土している。口縁部と底部を欠く個体である。体部外面は、下半をナデの後上半が横ナデにより仕上げられている。体部内面は、指オサエの後、下半が縦方向のナデ、上半が横方向のナデにより仕上げられている。その後口縁部内面が横ナデにより仕上げられている。

須恵器 杯蓋・杯・甕・壺が出土している。ただし、杯蓋・甕・壺については小片のため図化できなかつた。杯蓋は口縁部の小片が、甕は体部片が、壺は口縁部片が出土している。

杯は258の1個体が出土している。口縁部を中心に残存し、口縁部が受部上に直線的に立ち上がっていいる。

土製品 土玉が1点(259)出土している。一部をわずかに欠くがほぼ完存する個体である。径1.95cmを測り、径1.5mmの穴が貫通している。

時 期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

3. 小 結

以上21棟の壺穴建物について報告してきた。

21棟の壺穴建物は、SH01とSH02・SH05とSH06において切り合い関係が認められる以外、単独で検出されている。

まず、これらの壺穴建物は良好な状態で検出できたものはわずかである。建物の平面形は方形もしくは長方形を基本とすることは、共通した特徴として指摘することができる。その規模については、一定ではなく差が認められる。14.11m²のSH20が最小で、62.30m²のSH08が最大で、顕著な差が認められる。20m²から30m²が基本的な規模といえる。

これらの建物において主柱穴を確認できた建物は限られる。さらに中央土壙等を検出することはできなかった。このため建物の構造等を検討することは困難である。このなかでいくつかの建物内床面において中央部付近で焼土痕を確認していることから、少なくとも造り付けのカマドはなかったものと考えられる。

次に21棟の壺穴建物の時期についてであるが、南構Ⅲ期～Ⅵ期にかけて存続している。Ⅲ期はSH17、Ⅳ期はSH01～SH04・SH08・SH12・SH13・SH15・SH16・SH18・SH19、Ⅴ期はSH14、Ⅵ期はSH05～SH07・SH09～SH11・SH20・SH21が該当する。詳細については第7章第1節で検討したい。

建物内から出土した遺物は、基本的には土器が主体である。他に石器・土製品・金属製品が出土している。土器については、当該建物が機能していた際に使用されていたものと、建物廃絶後に廃棄されたものとが認められる。

土器の具体的な内容としては、前半期のものは土師器に限られる。後半期になると須恵器と土師器が認められる。前半期においては壺と甕が主体となっている。後半期になると土師器においては甕が主体となる。この他、瓶や甕が認められる点が特徴的である。須恵器については杯とその蓋が基本のセットで、いくつかの建物では高杯が加わっている。甕と壺に関してはわずかに認められる程度である。この他SH01からは製塩土器が出土している。

石器については、SH09・SH12・SH20の砥石が特徴的である。当該期の鉄器使用を裏付ける事例と考えられる。一方、鐵製品についてはSH19から出土した鉈に限られる。この他、SH05から台石が、SH20から磨石が出土しているが、やや古い様相が認められる。

土製品については、SH10・SH12・SH19から土錘が、SH21から土玉が各1点出土しているのみである。

以上が今回報告した壺穴建物の概要である。これをまとめたのが第4表である。特筆すべき建物が認められないことが特徴となっている。

第4表 穫穴建物一覧

No	検出範囲	建物規模 (m)	床面積 (m ²)	建物主軸方位	屋内施設	時期
SH01	約1/2	10.20×(6.00)	—	N10° W	主柱穴	南構IV期
SH02	約1/4	9.60×(3.00)	—	N16° W	主柱穴	南構IV期
SH03	全体	5.62×4.90	27.53	N20° W	主柱穴	南構IV期
SH04	全体	5.13×4.30	22.05	N17° 30° W	主柱穴	南構IV期
SH05	1/2以上	4.45×(3.45)	—	N24° 30° W	—	南構VI期
SH06	約1/2	6.30×(4.00)	—	N14° 30° W	高床部	南構VI期
SH07	1/2強	4.25×(3.30)	—	N12° 30° W	—	南構VI期
SH08	全体	8.90×7.00	62.30	N16° 30° W	—	南構IV期
SH09	ほぼ全体	4.68×4.50	21.06	N13° W	—	南構VI-1期
SH10	約1/3	(5.00)×(3.20)	—	N30° W	—	南構VI-2期
SH11	全体	4.20×4.10	17.22	N34° W	主柱穴	南構VI期
SH12	ほぼ全体	5.65×6.20	35.03	N42° W	主柱穴	南構IV～V期
SH13	ほぼ全体	7.00×4.40	30.80	N17° W	主柱穴 周壁溝	南構IV期
SH14	ほぼ全体	7.30×(7.30)	—	N 3° W	主柱穴	南構V期
SH15	約1/2	3.73×(2.50)	—	N 9° W	主柱穴 土壙	南構IV期
SH16	ほぼ全体	4.90×3.50	17.15	N32° W	周壁溝	南構IV期
SH17	約1/3	(6.50)×(4.30)	—	N 4° 30° W	主柱穴 焼土	南構III期
SH18	ほぼ全体	6.60×5.60	36.96	N31° 15° W	主柱穴	南構IV期
SH19	ほぼ全体	6.40×3.30	21.12	N13° W	焼土	南構IV期
SH20	全体	4.15×3.40	14.11	N12° W	焼土	南構VI-1期
SH21	ほぼ全体	4.20×2.38	9.99	N18° W	—	南構VI-1期

出土遺物								特記事項		
土師器				須恵器				石器	土製品	金属 製品
壺	甕	鉢	高杯	他	杯蓋	杯	高杯	他		
○		○		製塙土器 甕		○	○	壺・甕		SH02と切り合い
○	○	○								SH01と切り合い
		○			○					
○	○					○				
○		杯	○					台石		SH06に切られる
○			○				甕			SH05を切る
○			○							
○						杯B蓋				
○	○	壺	○	○	○			砥石		
○			○	○				土鍤		
○	○	把手	○	○						
○	○	○	杯	○	○	○		砥石	土鍤	
○	○	○	杯							
○	○	○	杯・甕		○		壺臺・壺			
○	○	○	甕							
○	○	○	○	瓶・把手	○	○	○			
○	○	○	○	甕						
○	○	○	○	器台						
○	○	○			○		甕	土鍤	鏡	
○		杯			○			砥石 磨石		
○	○	○	杯	○	○		甕・壺	土玉		